
朱月の巫女

桜木 玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朱月の巫女

【Nコード】

N2402Q

【作者名】

桜木 玖

【あらすじ】

シユカは十三歳。（十四歳になりました）

この秋の秋祭りで宵の宴に参加できるのを楽しみにしている普通の少女。

しかし、運命の歯車はシユカが生まれ落ちた瞬間から回り始めていた。

痣だと思っていた、背中の蔦が動き出すとき、シユカの運命も大きく動き出す。

朱月の巫女、シユカの和風ファンタジー。

プログラマー

二つの月が重なる夜。

重なつた月は朱い輪となつて闇に浮かぶ。

うっそうとした森の奥。太陽の下では蒼く広がる湖も闇に隠れてい

朱く浮かぶ月以外の一切の光を排除した闇にまぎれて一艘の舟がこぎ出した。

[illegible]

朱い柱の宮。一抱えもある柱は長い廊下に並んでいる。

その奥づまった白い部屋の中は油皿にともされた小さな明かりで揺れていた。

「ハヤテ。カカの様子はどうか。」

「はい、大巫女様。まだ気付かれていますくないようですが、姫巫女様が消えたことが知れるのは時間の問題かと…。」

ハヤテは、麻で編まれた円座に座る大巫女を下げた頭の下から見上げた。

80をゆうに超えたとは思えないそのすつと伸びた背筋、対照的に深く刻まれた皺からは威厳を感じる。もう、大巫女に仕えて10年以上となつたハヤテですら、こうして正面に対峙すると自然と頭が下がる。

見えていないはずのその薄茶色の瞳に見つめられると、何もかも見とおされているような気分になる。

「大巫女様。本当によかったのでしょうか。」

不安がつい口に出る。そんなハヤテに小さく微笑み、大巫女はゆつたり口を開く。

「姫巫女は朱月に守られておる。心配は及ばん。……14年。われわれに用意された時間はそれだけだ。せめてそれまでは自由を……。」
大巫女の表情は変わらないが、その声にはわずかながら憂いを帯びている。

「さあ、カカがやってきたようだ。ここからが大変だぞ、ハヤテ。」
「はい」

宮の下があわただしくなる。人々の駆け回る音の中にひととき大きな足音が近づいてきていた。

(1) 朝

(1)

シユカの朝は、水くみから始まる。

山裾がうつすら白む頃、シユカは手提げの桶を両手に持つて森の入口にある湖までやってくる。

桶2杯を三往復。それがシユカの朝の仕事だった。

「うん、今日も気持ちの良い朝。」

シユカは大きく腕を持ち上げて伸びをした。森から流れる澄んだ空気を胸いっぱい吸い込む。

少し冷えた夏の終わりの朝の空気は、寝起きの熱い体に気持ち良く染み込んでいく。

湖につくとシユカは桶を体のわきにそろえて置き、膝をついた。

来る途中で手折った榊の枝を澄んだ湖に濡らし、持ち上げて自分の額につける。

目を閉じると、シユカは小さく祈りの言葉をくちずさむ。

「豊かなわれらの湖の神様^{シエイ}、恵みの水をお分けいただくこと感謝いたします。」

湖の神に祈りをささげ、手と口をゆすぐ。

すべての自然には、神^{シエイ}が宿る。神に感謝し、力を分けていただくことで私たちは生かされている。それがおばの口癖だった。

朝一番のこの祈りを行うと、シユカの体に自然と力が満ちてくるような気がした。

シユカは立ち上がり、膝についた土を軽く払うと桶に八割がた水を汲んだ。

水を汲み始めた当初は、桶いっぱい水を汲んで運ぼうとしてつまずいたりよけたり。時間がかかってやっと家にたどりついて、桶の中の水は半分などということは珍しくなかった。

仕事をこなす年月の中で、シユカは体に負担をかけず効率よく運ぶ量を自然と身に付けた。

慣れた今では、陽が完全に山際に姿を現すまでには甕をいっぱいにする。

村の外れ、森のすぐわきがシユカの暮らす家だった。

柱の細い、簡素な家だがこのあたりの家は代々そんなものだ。

水くみが終わると、かまどに火をおこす。ここでもシユカが火の神に祈りをささげることが忘れることはない。

「気高き火の神様。その熱き炎をお分けいただくこと感謝いたします。」

目をあけると火打ち石で枯れ草に火をつける。

炭の上に積み重ねた薪の隙間にそっと差し入れて薪に火を移す。

しばらく経つとぱちぱちと音がして、炎がかまどの中に広がっていた。

シユカは満足そうに頷いた。

かまどにかけたなべの湯が沸くころ、おばは竹で編んだざるに畑の野菜を載せてかえってくる。朝餉は野菜と少しのコメを炊いた汁だ。

二人つきりのご飯は、しかし、いつもにぎやかだった。

もっぱらしゃべるのはシユカで、おばはそれを表情をにこやかに聞いている。

この家に暮らすのはおばとシユカの二人だけ。

シユカが物心つく頃にはすでにそうだった。

おばはシュカの本当のおばではない。

その事実もまたシュカが物心つくころには当然のこととして知っていたように思う。

誰に、改まって聞かされた覚えはない。

13年前の雲ひとつない真つ青に晴れた日の朝、先ほどシュカが水を汲んだ湖のほとりに白い産着に包まれたシュカが置かれていたのだという。

それを朝の水汲みに訪れていたおばに拾われたのだ。

拾われた時、産着は組紐で留められていた。

その組紐に編みこまれていた意匠が朱花の花だった。シュカという名前はその花の名からとられた。

村の中ではシュカが拾われた子であることが隠されることもなかった。

だから、シュカは両親を知らない。

両親どころか、自分がどこでどう生まれたのかも知らなかった。

それでも、シュカがこの暮らしに不満を持ったことはなかった。いつもにこやかで、でもしつけには人一倍厳しかったおばは、もうすぐ14歳になるシュカを普通の子と変わりなく大切に育ててくれた。

村のみんなも拾われ子のシュカを村の一員として受け入れてくれた。たまに「拾われっ子」と馬鹿にする心ない子もいたが、必ずシュカをかばい、手を引いてくれる子があった。それがこの村の温かく、シュカがこの村を愛する理由でもあった。

シュカは、自分が村の人々からも大切にしてもらっていることを知っていたのだ。

それは、シュカが、というよりも村の人々から信頼を受けるおばのおかげでもあった。

おばは村のほかの人々と同じように畑や糸紡ぎをして暮らしている。

しかし、豊作を祈る春の祭りや収穫を祝う秋の祭りでは、祈祷をさげたり、村の人に頼まれてトを行ったりとかんなぎのような役目も行っていた。

おばがかんなぎを務めるようになってから、大きな天災もない。

そのため、おばは村の人々から頼りにされ、敬われていた。

シュカは小さい頃から村の人々の前で凜と祈るおばの姿を見て育った。

60歳を過ぎても、若かった頃大変美しかったであろう面影を残すおばはシュカの自慢であり、そのおばに育てられたということが誇りでもあった。

そしていつか、おばの後を継いで村のかんなぎを務め、村の役に立つことでおばや村の人々に恩返しをしたいと思いますというシュカだった。

(2) 機織り娘

(2)

「おば様、じゃあ畑に寄ってそのあと機織り場に行ってくるね。」
シュカは機織りの道具を持つと、糸を紡いでいるおば様に告げた。
おば様は器用に手を動かしながら、顔をシュカのほうに向けた。
そして穏やかな笑みを顔に浮かべて言った。

「シュカ、今日は昼を過ぎたところには雨になる。早めに機織り場には早く行った方がいい。」

おば様に言われ、西の空を見上げる。

三連連なる山の向こうが暗い。確かに昼過ぎにはこのあたりも雨になりそうだ。

「わかったわ、おば様。今日は畑によるのはやめて機織り場に行くわ。」

ありがとうと言いながら、シュカは戸口を出て村へ続く道を駆けて行っていた。

シュカは畑仕事の合間に村の機織り場で機織り娘として働いていた。多くの村の娘たちは10歳を過ぎた頃から機織り娘として働くようになる。

機織り機は高価なため、村の共同の機織り場がつくられていた。娘たちはみな畑仕事をしながら順番に機を織りに来るのだ。糸を紡ぐのは、畑仕事のつらい年寄りや農閑期みんなの仕事だった。そこで織られた反物などを村の若い衆が市に売りにいくという仕組みになっていた。

反物によって得られるお金などは村に均等に配分される。

このあたりでは、機を上手に織ることもよい嫁の条件の一つだ。嫁ぐ前の少女たちは、機織り場で経験を積んで腕を磨いていた。

シユカは今年の秋で14歳になる。村の機織り場へ出るようになってまだ3年だが、元来が器用なたちだったのか、嫁入り前の10代の少女の中では抜きんでて機織りがうまかった。

シユカの織る細かい柄と、独特の色遣いは町でも人気だった。

もつとも得意としていたのは、自分ゆかりの組紐に織り込まれていた朱花の花の模様だった。

村の機織り場がもうすぐというところで、シユカは前を歩くこげ茶色の髪の少女を見つけた。

駆けてきた速度をさらに上げて、少女の隣に並んだ。

「おはよう、ノノ姉。」

シユカは走ったせいで落ちてきた横髪を耳にかけると、笑顔で声をかけた。

「おはよう、シユカ。そんなにあわてなくても、たぶんまだ誰も来ていないわよ。」

こげ茶色の髪の少女は、隣で荒い呼吸をするシユカに少し呆れつつ、そばかすの散った頬を持ち上げ優しい笑みを浮かべた。

機織り場は共同であるため、機が開いていないこともある。雨などが降って外での仕事ができないときは混雑して織れないこともある。「今日は昼から雨になりそうだから、早めに機織りにかかるうと思つて、急いできたの。おば様にも雨が降るから早く行つておいでつて。」

「そう、それはきつと降るわねえ。私も早く来てよかったわ。」

ノノ姉は、シユカの三つばかり年上だ。昔からシユカを妹のように可愛いがってくれた。

本人は気にしているようだが、そばかすの散った頬は白く綿毛のように暖かだった。加えてこげ茶色の髪は太陽の光を浴びてきらきら

と輝いた。

全身から優しさがあふれているようだ。前からシユカは思っていた。シユカがもつと幼かった頃、いじめられるときは決まってノノ姉がかばってくれた。

シユカに機織りを教えてくれたのもノノ姉だった。

シユカはこの優しい少女が大好きだった。

ノノ姉はこの秋、隣村に嫁ぐことが決まっている。

ノノ姉を嫁にするのは、このあたりの若者衆の中では働き者と評判の高い、背の高い青年だった。

去年の秋の祭りで、ノノ姉はその青年から八重花を贈られたのだ。

八重花は約束の証。秋祭りですれを贈るのは、愛の告白、婚姻の申し込みという意味があった。

秋祭りの宵の宴では、このあたりの郷の若者たちが集まる。普段、仕事に追われている田舎の若者たちにとって一年に一度の心躍る日だ。

若者にとってここは出会いの場であり、夫婦となった者にとっては思い出の場なのだ。

秋祭りで素敵な男性から八重花を贈られることは、年頃の少女たちにとってあこがれだった。

もちろん、シユカにとっても。

宵の宴に出られるのは13歳から。昨年は、ノノ姉が結婚を申し込まれる様を目の当たりにし、いつか自分もと思ったのはきつとシユカだけではなかったはずだ。

ノノ姉と機織り場に着くと、シユカは前回まで織っていた反物を取り出し続きを折れるように準備する。

ノノ姉の言うように、機織り場にはまだだれの姿もなかった。

機織り機の前に座り、呼吸を整えると目を閉じて、心の中で祈りの言葉をつぶやく。

「優しき機織りの神様、^{シエイ}ノノ姉を守る反が作れるよう、力をお貸しください。」
目を開けたシュカは、そつと杼^ひを持つとゆっくりと踏み板を踏みこんだ。

姉のように慕うノノ姉が求められて嫁ぐのはとてもうれしいが、秋以降はきつとすぐくさみしくなるんだろうと思う。しかし、誰よりもノノ姉に幸せになってほしいと願っているシュカは、お願いをしてノノ姉の婚礼の衣装を織らせてもらっていた。

穢れを払うといわれる濃紺の地に、白と黄で八重花の模様を織り込む。

伝統的な婚礼衣裳の形式だ。襟となる部分は生家の村の模様と嫁ぎ先の村の模様、自分の名前にちなんだ模様などを組み合わせるだけの模様をつくっていく。

「ノノ」は、春に森でさえざる躑躅^{つじ}色の尾を持つ小さな鳥。シュカは、躑躅色の糸を使って鳥の模様を織りあげようと考えていた。

ひと織りひと織りに思いを込めて。機織り場には小気味良い機音が鳴っていた。

(3) 雨宿り

(3)

「…シユカ。」

誰かに呼ばれたような気がしてシユカは顔を上げた。

周りを見渡すと、いつの間にか機織り場は若い娘たちであふれていた。

どうやら機織りに気を入れすぎて、ずいぶん時間がたっただけ。ひさしの向こうをみるとすでに雨は降りだしていた。

「シユカてば！」

ぼうつと外を見るシユカの肩をゆする人がいる。

そうそう、呼ばれたのだと肩をゆすっている人物を見上げれば、そこには頬を膨らましたヒマリが立っていた。

「ヒマリ、おはよう」

「おはようじゃないわよ。もうとくに昼よ。ずいぶん声をかけたのにちつとも気付かないんだから。」

シユカは機織りをしていると、どうも気が入り込み周りが全く見えなくなってしまう。

いつものことではあるが、今日は特に夢中になっていたらしい。

「もう、一緒に帰ろうと思ってたのに。雨が降ってきちゃったじゃない。」

シユカは肩をすくめるばかり。

「ヒマリ、許してあげて。シユカは私の婚礼衣装を織ってくれているの。私が代わりに謝るわ。」

困ったように眉尻を下げてノノ姉がかばってくれる。

申し訳ないなと思いつつも、やっぱりノノ姉は優しいと思う。

「シユカ、ノノ姉の婚礼衣装、それね。うわあ、なんてきれい。」
ヒマリの声のほかの娘たちも寄ってきた。織りかけの機を覗き込んで感嘆の声を上げる。

「なんて細かい模様。」

「ほんと、素敵ねえ。」

「ノノの模様の組み合わせも凝ってるわ。」

口々に言われ、シユカは照れながらもうれしく思う。

「どれどれ？や、いい色遣いだ。織りも丁寧で細かいね。腕を上げたねシユカ。」

若い娘たちの間から顔をのぞかせたのは、機織り場の責任者も務めるアインだった。

村一番の織り手からも褒められ、シユカは頬を赤らめて小さな声で「ありがとう」と言った。

「でも、今日はそのくらいにしときな。順番待ちの子もあるし。」

アインの声に頷いたのはノノ姉だ。

「そうね、根の詰めすぎは良くないわ。今なら雨も小ぶりだし、今のうちに帰ったほうがいいんじゃない？」

それに返事をするかのように、シユカのおながが鳴った。どつと笑い声起きる。

「そうね。おながも返事をしているし。ヒマリが怖いから帰ることにしよう。」

おどけて言つと、ヒマリがまた頬を膨らますのだった。

「ねえ、シユカ。」

雨足が強くなり、ヒマリとシユカは村の上にある大きな楠の下で雨をしのいでいた。

「ん？」

シユカは大切な機織りの道具が濡れていないかそつと懷をのぞきこ

んだ。

「もうすぐ秋祭りだね。」

ヒマリもシユカとおなじ14歳になる年だ。去年は一緒に初めての夜の宴に出た。

そして一緒に、ノノ姉が幸せな求婚を受けるのを見たのだ。

「シユカは今年の秋祭り誰かお目当ての人はいないの？」

お目当て……シユカより少し低い位置から覗き込むように見ているヒマリの目を見ながら口の中で繰り返してみるが誰かと思いつくものがない。

「ヒマリにはお目当てがいるの？」

「わたし、この秋はセンジと絶対いい感じになりたいわ。声をかけてくれたらいいけれど、もし声をかけてもらえなくてもそれとなく近づいて声をかけるつもりよ。メイやラシユヤもセンジに気があるらしいから絶対に先に声を掛けなくちゃ。」

シユカは力強く宣言するヒマリに、内心驚いていた。確かに昨年の宵の宴でのノノ姉の婚約にはあこがれたが、シユカは具体的に誰と仲睦まじくなりたいなどと考えたことはなかった。ただ漠然と憧れていただけだった。

やわらかいふわふわとしたくせ毛のヒマリはその髪がよく似合うかわいらしい面立ちをしていた。そのかわいらしい顔とは対照的な勝ち気な性格は、とても愛らしい。きっとヒマリならセンジを引きつけることだろう。

ヒマリにメイ、ラシユヤ……シユカは自分と同じような年の子たちがすでに恋情を持っていることに少なからず衝撃を受けていた。

「シユカったら、そんなんじゃ宵の宴で独りぼっちよ。2年目は楽しまなきゃ。」

そう言われても、そんな風に村の男の子を見たこともなく。

困ってしまったシユカの顔を呆れたように見ながらヒマリはさらに続けた。

「まだ嫁をとってない素敵な人、結構いるのに興味ないのね。西の

村のトイとかは日に焼けて力強い感じが、男らしくて人気があるわ。隣村のリユエルは、細面の優しい顔の上、この1年でずいぶん背も伸びて大人らしくなっただって人気が上がると思うわ。」

「くわしいのね。」

ヒマリの話に驚きを通り越して感心してしまうシュアだったが、そのあとの一言にさらに目を剥いた。

「シュカが知らなすぎるのよ。ああ、シュカ目当ての子もいるのに、本人がこれじゃかわいそうね。」

「なっ、ないわよそんな物好きな人。いいのよ、気を遣わなくても。」

黒いまっすぐの腰までの髪につややかな白い肌。紅をささなくても赤い唇に黒めがちな瞳。みんながうらやましがるような容姿にあつて、無邪気で屈託のないシュカ。女の子の中ではいつも元気で朗らかな彼女が、なかなか色恋に興味も持てず男性の前だと委縮してしまう。

本人には自覚がなさそうだが、無意識の内に距離を取る姿をこれまでも見てきた。

そんな彼女に男の子たちもなかなか近付けずにいることに本人は全く気付いてないのだとヒマリは心の中で小さくため息をついたのだ。

(4) 眠れない夜

(4)

ヒマリと雨宿りしているうちにいつの間にか雨もやんでいた。村の外れの分かれ道でヒマリに手を振って、シュカはおばの待つ家へと急いだ。

その日の晩、シュカはなかなか寝付けずにいた。

薄い布団の中で寝返りを打つが、心の中が晴れない。自分と同じような年の子たちの恋情に正直驚いた。

宵の宴での幸せな約束は憧れだったが、ヒマリに言われて自分がそんな未来を漠然としか考えたことがないことに気付いた。

改めて考えると、なぜか宵の宴で旦那さまを見つけて、夫婦となつて、子をなしてという当たり前の未来を想像することができない。

30や40になったときの自分の姿が想像できない。

何年か経って、いろいろなことを経験すればそんなことを思い描くようになれるのだろうか。

そんなことを考えていると、昨年のノノ姉の姿へのあこがれも周りの娘たちが騒ぎたてるのに合わせてそんな気になっていたのかもしれないという気になったりしてしまう。

シュカはおばを起こさないようにそつと布団を抜け出し、草履を持ってはだしのまま外に出た。

以前と比べずいぶん涼しくなった夜の風に、いつの間にか随分近寄ってきている秋の気配を感じる。

シュカは着物の合わせをきゅつと寄せて、草履をはくと森のわきの道を歩き出した。

森奥からは獣の啼く声もかすかに聞こえるが、怖くはなかった。

あたりは暗いが、見上げると二つの月が寄り添うように出ている。

月明かりに照らされて、物の形がぼつと浮かび上がる。

昔から、それこそやっと歩き出す頃から何かあるといつもこの道を通って必ず向かうのは湖だった。

シュカが捨て置かれた場所。

たからかどつかは分らないが、湖に来ると心がすつと落ち着いてくる。

さっきまで胸の中でぐるぐると渦巻いていたことが溶けだすように、流れていく。

今日は月が出ている。

もしかしたら、会えるかもしれない。

シュカは湖の淵にしゃがみこむと目を閉じ、手を合わせた。

「美しき双子月さま、豊かな湖の神様^{シエイ}、ひと時ここで休むことをおゆるしてください。」

シュカが目をあけると、水面に淡い霧が立ち込め始めていた。

こうなると、かすかに聞こえていた獣の啼き声も静まり返り、一切の音がなくなる感覚がする。

湖の上から、滑るように少年が歩いてくるのが見える。

やっぱり会えた。

少年は、シュカが月夜の晩に湖にやってくると、必ずと言っていいほど現れた。

初めて少年に出会ったのは5つのとき。

夜中に急に眼が覚め、心がざわざわしていてもたってもいられなくなった。

布団から起き出したシュカは、昼間でも一人では来たことのない湖へやってきていた。自然と足が向かっていた。

そこで出会ったのがこの少年だった。

「やあ、シユカ。久しぶりだね。」

真っ白な上等な着物に身を包んだ少年は、目を細めて美しい頬笑みを浮かべる。

「トウヤ。なんだかいろいろと考えていたら眠れなくなっちゃって。」

「そう、シユカに悩みごとなんて・・・珍しいね。」

クスツと笑ってトウヤは優しくシユカの乱れた髪を梳いた。

シユカはトウヤの白くて美しい指を見ながら、くすぐったそうに顔を揺らす。

「私、自分が思ってた以上に子どもなのかなって・・・。」

トウヤは神を梳いていた指を滑らせて頬を優しくなでた。

「シユカはそこがいいところじゃないか。わたしはそのままのシユカがすきだよ。」

トウヤの手でなでられると、いつもシユカはまるでネコになったかのように甘えてしまう。

シユカは村の少年たちに感じる漠然とした不安感を、トウヤには感じるものがなかった。

シユカにとって、トウヤは心おきなく、何も考えず甘えられる存在だった。

月夜の晚しか会えない、時に兄のように、父のように、母のように優しくシユカを包みこんでくれた。

トウヤが何者なのかシユカは知らない。初めて会ってから、シユカと同じように年々成長しているが、本当に人かどうか分からない。何となく敬虔で、神聖な雰囲気を持った少年だった。

何しろ、湖の上からやってくるのだ。いつも真っ白な美しい着物の身を包んでいるし、畑仕事についたことのない、細く美しい手足からも、もし人だったとしてもこのあたりの子どもではないことは確かだ。

初めて会ったときは、シユカと同じくらいの幼児だった。まるでシユカの成長に合わせるように、シユカに会うたびに成長していた。見かけは少年だがその心は果てしなく深く広い。

さまざまなことをよく知り、たくさんのことをシユカに教えてくれた。

さまざまな疑問があるものの、シユカはそれをトウヤに問掛けることはなかった。

それを聞いた瞬間にトウヤが二度とシユカの前に現れないのではないかという恐れもあった。

それに、トウヤの深い深い瞳を見ると、シユカの何もかもがトウヤには知られているような気になってしまうのだ。疑問をぶつけないでも、それら全部を包み込むのがトウヤという存在だった。

ひとつだけわかっているのは、何に変えても失いたくない存在だった。

だから、トウヤのことを誰にも話したことはなかった。

「シユカ、何も心配することはない。シユカには与えられた運命さだめがあるんだ。時が来れば動き出す。何も心配することはない。君は朱月の巫女なのだから……。」

気持ちの良く目を閉じていたシユカは、目をあけてトウヤを見上げる。

「トウヤ……。」

いつもの優しい声に表情だが、何か大切なことを言われた気がする。それを問いかけようとするが、頭をゆっくり撫でるトウヤの指がそれを邪魔するように気持ちが消えていく。いつの間にか、また瞳を閉じて、体をトウヤにゆだねてしまう。

不意に、トウヤの手が止まる。

「もう、時間のようだ。大丈夫、シユカ。君には私が付いている。今夜はもう、月が隠れる。月が隠れてしまう前に行きなさい。」
シユカはトウヤの目をじっとみつめ、小さく頷いた。

(5) ノノ姉の婚礼

5)

「シユカ、昨日の晩また湖に行つたね。」

朝餉を食べているとき、おばばは唐突にそう言った。

不思議なもので、夜中シユカが浮沈を抜け出すとき絶対おばばは寝ているし、起こしたこともない。しかし、次の日の朝必ずばれてしまう。

それでそれを咎められたことはないが、おばばにそう言われると何となく胸にチクリと感じる。

小さくなつてシユカは頷いた。

「おばばにはどうしてもばれてしまうね。どうしてわかるの。夜は寝てたでしょう?」

おばばは、啜つていた汁を盆に置くと、目線を上げてシユカを見る。「わかるさ、纏つとるものが違う。昨日は、灰色の氣がシユカにまとわりついた。それがすつきりしとる。」

へえ、纏っているものか・・・と心で感心しながらおばばをちらつと見ると、おばばはこちらを見ずに言った。

「まあ、それはいい。シユカ、最近痣はどうだ?」

表情が変わらなかつたので、本当はおばばがどう思っているのかもわからなかつたが、聞かれたことを考える。

「別に変わりないわ。背中だからわからないけどそんなに広がってないと思う。痛みもない。」

シユカの背中には赤い痣があつた。痣は赤ちゃんだった頃には既にあつて、腰のあたり、ちょうどおへその裏側あたりに小さな桜の花びらのようなものだった。

ただ、シユカの成長とともにだんだんと大きくなった。

それはまるで花を散らしたように広がっていき、今では背中の半分

くらいを埋めている。

痣が増えるとき、ちりつと身を焦がすような小さな痛みが伴う。痣が増えるのは突然で、ひと月に二枚、三枚と増えることもあれば、一年近く増えないこともあった。

普段は、何の障りもなくあることも気にせず生活している。

ただ、ここ一年くらい、花が散ったようだった痣が蔦を伸ばすように急に増えてきていた。

シユカ自身は、ずっと一緒に過ごしてきた痣は自分の一部として受け入れているし、花のようなあざは好きである。

しかし、おばははずっとこの痣のことを気にしていた。痣が増えるたびにまるで自分が痛みを受けたかのようにつらそうな顔をする。だから、この頃はシユカが自分から痣のことを話すことはなかった。おばはほっとしたように息をつく、につこりと微笑みかけた。その顔を見つめながらおばは愛を感じ、シユカも自然と笑みを漏らした。

夏の終わりは、夜の涼しさがうそのような残暑が続いた。

シユカは畑仕事と機織りで忙しく過ごした。

忙しくしていれば、いろいろなことを考えずに済んだ。

ふと気づけば、秋祭りはもうすぐそこまで来ていた。

そんな中、ノノ姉の婚礼が行われた。

シユカの織りあげた婚礼衣装を身にまとったノノ姉は、薄くおしろいをはたき、紅をさしていた。今まで見たどの花嫁よりも美しく、幸せそうだった。

花嫁らしく、今までおろしていた髪を頭の上に結いあげ、八重花が

さしてあった。

ノノ姉の旦那様になった隣村のティラセは、背が高く、しっかりした体つきの男性だった。

ノノ姉と同じ濃紺の衣装をまとっていた。これは、ノノ姉がずっと織っていたものだ。

花嫁の手で丁寧に織られたそれは、ティラセのスラっとした体格によく似合っていた。

誰もが思わずにこやかに、優しい頬笑みをいつもたたえているティラセは美しいノノ姉をとろけるような笑顔で見ている。

婚礼は、村の広場で行われた。

二人は広場の中央で並んで立ち、いろいろな人から祝福の言葉をもたらしていた。

誰にも優しく、いつもつつましかで美しかったノノ姉は、村のみんなから心から祝福されていた。

大切なものを労わるような手でノノ姉の手を引き、正面に立つ村長むらおな様の前まで行くと二人は腰を折った。

誰もが、二人が愛し合い、幸せそうであることを感じていた。

村長様から、祝福の言葉を受けると、村長は婚礼の祈りをささげることができるおばばを呼んだ。

おばばは白い衣装に身を包み、喜びを湛えた顔で二人の前に歩み出た。

おばばは、右手に持った鈴をシャランと鳴らすと、音を降らしながら祈りの言葉を口にする。

いろいろな神の名をひとつずつ挙げ、一つ一つにご加護をいただく。二人は膝について頭を下げて神聖な祈りの言葉を受けた。

最後にシャランと大きく鈴を鳴らすと婚礼の祈りは終わった。

「幸せにおなりなさい。」

おばばが二人に祝福の言葉を告げると、二人は下げていた頭を上げ

てほほ笑いあつた。

この後は村を出て隣村に受け入れられる儀式を行う。

村人は二人を見送りに村の端までやってきていた。

シユカは、ずっとノノ姉に何も言えないままここまで来てしまった。何か言わなくては、何か言わなくてはと思つてもなかなか口を開くことができない。

ノノ姉は、そんなシユカをいとおしげに見つめると村を出る一番最後にシユカのそばへ寄つてきた。

ノノ姉はシユカの頬を優しくなでてくれた。

「シユカ、私の可愛い妹。離れてもあなたは私の妹よ。いつもあなたの幸せを祈っているわ。新しい家にも遊びにいらっしやいね。この衣装をありがとう。」

シユカは、婚礼の間ずっと我慢していた涙があふれるのを感じていた。

目の淵にぶつくりとたまつた涙がぼろぼろと流れると、ノノ姉は目を細める。

「ノノ姉、私もよ。いつもいつも、シユカ姉の幸せを祈っているわ。きつときつと元気で、いつか赤ん坊が生まれたら私にも抱かせてね。」

「もちろんよ」そう言いながらシユカ姉はシユカの頭をなでると、そつとしゃがみこんだ。

ノノ姉は袖口から細かく折り込まれた真新しい組紐を出すと、シユカの腰に巻いた。

成長してもう巻けなくなった、拾われた時に巻かれていた組紐とおなじ朱花の花の模様が編みこまれていた。

「・・・・ノノ姉。」

「私が織つたの。祈りをたつぷりと込めてあるわ。お守りよ。」

そういうと、ぎゅつとシユカを抱きしめるとティラセのもとにもどり、しっかりと二人で歩き始めた。

普段は会えないが、永遠の別れではない。

迫った秋祭りでも会うことができる。

そう言い聞かせても、シユカの中のさみしさはどうにもならず、組紐の先をしつかりと握りしめたまま、二人の姿が見えなくなってもずっとそこを離れることができなかった。

見かねたおばが、肩を抱くようにしてシユカに触れる。

そうしてようやくシユカはそこから動くことができたのだった。

ずきん・・・背中がまた一つ痛んだような気がした。

(6) 扉

(6)

いよいよ明日は秋祭りだ。このあたりの村が集まって行つたため、朝からいろいろな村の人々が入り乱れて準備していた。

なんとなく空気が浮足立っていて、祭り特有の熱気を感じる。

誰もかれもがにぎやかで、幸せそうで、見ているだけでうれしくなる感じ。

毎年、この空気感がシユカは好きなのであるが、今年はなぜかいつものように心が弾まない。

ノノ姉の婚礼からさみしさを引きずっているのか、胸がもやもやしてしまふ。

しかし、秋祭り。ずっと楽しみにしていたのには違いなく、今日は気持ちを切り替えて準備に取り掛かっていた。

シユカは、今年とれたイネのわらを編み込んで輪を作っていた。これは、秋祭りの祭壇に供えるもので、一人が一つ供えた後、宵の宴で燃やされる。

その宵の宴では、火を囲んで人々が踊ったり語ったりするのだ。シユカは祈りを込めてひと編みひと編み編み込んでいく。下を太く、だんだんと細くしていく作業は慣れないとなかなか難しい。

手先の器用なシユカは、頼まれて近くの子供たちの分も編んでいた。そうしているうちに、お供えの野菜を収穫していたおばばがかえてきたようだった。

戸口を開けておばばが顔を出す。

「シユカ、いるかい？」

「はい、おばば。ここよ。」

シユカは道具を片付けておばばのもとに駆け寄ると、おばばの背中の籠を下すのを手伝う。

「これを湖で洗ってきておくれ。」

籠を覗くと、カボチャやイモなどが入っている。

「わかったわ、行ってくる。」

そのまま、籠を背負うとシユカは湖へ駆け出した。

秋になって大分風も冷たくなってきたけれど、今日は穏やかな風が吹いている。

高く感じる秋晴れの空が木々の隙間からちらちらと見える。

林を抜けて、湖へ着くと籠をおろして膝をついた。

「豊かなる我らの神さま、秋の恵みを清めさせてくださいませ。」

シユカはイモを一つとると、湖に向けて放り投げる。

一つは神様^{シエイ}への捧げものだ。

イモが一度水面に顔をだし、ゆっくりと沈むのを見届けると、シユカは野菜を洗い始めた。

籠の野菜がほとんど洗えた頃、湖の東の森のほうからガサガサという音がした。

鹿などの獣が、みずを飲みに来たのだろうか。普段、人がいるときはめつたに顔を出さないのに、いぶかしく音の出たほうに目をやると、旅装束の二人の男女が立っていた。

男のほうは四十代半ばだろうか、長旅だったのだろうか少し無精気に生えた髭、太い眉は少し下がっているが、温和そうな瞳が印象的な顔だ。がっしりしているが、どこか優しい雰囲気を持っていた。女は三十代といったところだ。笠をかぶっているが、その下から小さな口が覗いている。

小柄な女と背の高い男の組み合わせは、どこかちぐはぐである。

近くの村で見る顔ではないし、秋祭りに来た人だろうか。

旅の様子が見られるが、もしかしたら秋祭りの楽師なのか・・・。

格好はただの農民といった感じでもなく、役人とも違う。淡い色の旅装束を着ている。編みりみたことはないが商人なのだろうか。シユカが思案しながら不躰に見ていただろうか、女のほうがシユカに気づいた。

しまったとシユカが思う頃には、女が男に声をかけシユカを指さした。すると、男もシユカのほうを見た。

じつとシユカを見る二人の目に落ち着かなくなり、シユカは立ち上がると小さく頭を下げた。

すると二人はシユカのほうに歩み寄ってくるようだった。

何か言われるのだろうか、と内心ドキドキしながら近づいてくるのを待つと意外にもにこやかな表情の

二人がやってくるのが見えた。

ほつとしながら、シユカは急いで野菜を籠に入れはじめた。

ずいぶん近くまで来たのを確認すると、立ち上がりそちらに向き直った。

「こんにちは、先の村の方ですか？」

話しかけたのは女のほうだった。女は、笠をはずし、首をかしげながら聞いてくる。

女は小柄だったが、大きな目、笠の下から見えていた小さな口は肉厚で、憂いを帯びた美しい顔をしていた。

「はい。そうです。」

「人を訪ねてきたのだけれど、うかがってもよいかしら。」

二人のそばで女と会話するシユカをじつと見つめている男の視線に気づかないシユカは、にこやかに答えていた。

「ええ、どんな方をお探ですか？」

女は安心したように微笑むと、言葉を継いだ。

「この村のかんなぎをされてるって聞いたんだけど……。」
村のかんなぎ……おばばのことだ。

「おばば様のことですか？」

「あら、知っているのね、申し訳ないんだけど、そちらに案内していただけないかしら。」

おばがうでのいいかんなぎであるため、今までもこうして占いなどを頼みに来た周辺の村の人はあった。

しかし、遠くからの来客は初めてだったのでシユカは少し驚いていた。

「かまいませんよ、ただ、この芋を全部洗ってしまったからでも構いませんか？」

洗っていないイモはあと2、3個だったので、終わらしてしまおうとシユカはお願いをした。

「ええ、もちろん。案内してもらう代わりにその籠は、この人が持つから。」

そんな、とんでもないつとシユカがいう前に男は籠を持ち上げてしまっていた。

取り返そうとしたシユカを無言の笑顔でとどめると男は片腕に籠を抱えてしまった。

仕方なく、「すみません。」と言ってシユカは残ったイモを急いで洗った。

イモを洗い終えると、すつと大きな手が横から差し出される。困ったように見上げて、やはり無言のまま笑顔でぐつと手をさらに差し出す。

また、仕方なく「すみません。」と言ってイモを差し出した。

シユカに道案内をされながら、女はシユカに話しかけ続けた。

女はその顔立ちからは想像つかないほど人懐っこく、シユカは何の疑問も持たずに女の質問にするすると答えていた。

この村のこと、おばのこと。

男は二人のあとについて洗いながら、楽しそうにしゃべるシユカの横顔を見つめていた。

女は、にこやかにしゃべりながらシユカに気づかれぬよう男に目配せをした。

男はそれにうなずき返す。

突然、女がつまずいた。ふらつと前のめりになった女に、シユカはとっさに手を出して女を支えようとした。

シユカが女に触れた瞬間。

シユカの全身に稲妻のようなものが走った。

腰の中心あたりから指先のほうに四方八方にものすごい速さで走っていく。

シユカは雷に打たれたのかと思いながら、だんだんと薄れていく意識の中で自分の指先が赤く染まっていくのを見たような気がした。シユカはそのまま前のめりに倒れて行った。

(7) はじまりのはじまり

(7)

少女が朱の宮に上がったのは4歳の時だった。

赤子のころから少女が大泣きするあとは必ず雨が降った。

また、死を目前としたものには怖がって近づくことができなかった。言葉がしゃべれるようになると天気や失せ物の場所を言い当てるようになった。

少女にとっては、“わかる”ということはごく当たり前のことであつた。

しかも、少女には人々の“まとうもの”が見えた。周囲の“まとうもの”が、好奇心から猜疑心、そして欲望へと変わっていくのも少女には見えてしまった。

両親には愛情を持って育てられたと思う。だからこそ、欲望を怖がる娘を守ろうとしてくれた。

何かに利用されることを恐れ、少女を守るためにどうすればよいかを悩んだ両親と村長が相談した結果が朱の宮へあげることだった。

少女はその能力で両親の思いは“わかつて”いた。

だからこそ、娘を4歳という幼さで親元から離さざる得なかったことに罪悪感を抱く両親の気持ちもよく“わかつて”いた。

別れの日、両親の思いを理解し、涙を流さず微笑んですら見せる少女。

対照的に少女の母は、涙を止めることができず苦しそうに少女を抱きしめた。

父に連れられて家を発つ少女の胸に母の苦しげな顔は焼き付けられた。

それから幾年も過ぎたが、いまだに思い出すのはあの時の母の顔である。

初めて目にした朱の宮の門は、見上げれば頭の後ろが背中につくくらい高くそびえていた。

門のところで父とは引き離され、それが家族との今生の別れとなった。

朱の宮と呼ばれるだけあり、門から入って目にした建物はすべて朱い柱で支えられていた。

少女が一抱えできそうなくらい太い柱は、先が遠くに見える長い廊下に等間隔ですらつと立っていた。

少女を迎えたのは、長い髪を後ろにひとくりにした、年かさの行った巫女だった。

巫女は白い衣装に朱い組みひもと柄の組みひもを2本腰に巻き、下には朱い袴をはいていた。

最初に連れられたのは、湯あみだった。少女は若い巫女に引き渡された。

長旅でほこりだらけになった体を3人の巫女に洗われる。

田舎の村で暮らしていた少女に湯あみの習慣はなく、湯で体を洗われることに緊張しながらも、汚れが落ちていくのは気持ちよかった。湯から上がると、髪を丹念に梳かれた。やや、長さが不ぞろいであったが無理やり後ろに流して、しっかり結われた。

ほかの巫女のように白い衣装を着せられ、初めての袴に足を通す。

こんな上等な着物に手を通したことのなかった少女は、緊張しながらもその感触を楽しんでいた。

少女の世話をする巫女たちは、年かさな巫女も含め、一様に口を利かなかった。

にこやかに接してはくれるが、いつもなら感じるこのできる“まとったもの”も感じるができなかった。

少女はだんだんと不安が募っていた。“まとったもの”を感じるこ

とができない人に出会ったのは初めてだった。
身支度かと整うと、先ほどの年かさの巫女に引き渡された。

巫女に連れられ、行きついたのは永遠に続くのではと感じるほど長い廊下の先にある位置さな部屋だった。巫女にならって座らされた少女は、頭を下げ扉が開けられるのを待った。

「大巫女様、新しい巫女を連れてまいりました。」
「入れ。」

中からは、想像よりも若い女の声がした。
頭を下けたまま、するようにして少女は部屋に入った。

「面をあげなさい。」

少女は顔をあげ、その前に座る人にくぎ付けとなった。
小さな部屋には、背筋を伸ばして座る美女がいた。

真っ黒でつややかに流れ落ちる髪、ほかの巫女と同じ衣装であるが、その上に薄い透き通った織物をかぶっていた。
鼻筋はすっと通って、つややかな唇がその下に形作られていた。しかし、長いまつげを携えた瞳は閉じられている。

くつと美女の口角が上がる。

「賢そうな良い顔をしておるな。そのほう、名は？」

少女は、目を閉じたまま自分を“視る”大巫女と呼ばれた美女を見つめたまま答えた。

「イヨでございます。」

美女は満足そうに微笑むと言った。

「うむ。今日からここがそなたの家じゃ。たくさんのことを学ぶとよい。」

それが少女イヨと大巫女の出会いだった。
そして、イヨが巫女となった最初の日だった。

(8) イヨ

(8)

「まずは、あなたのその力を使いこなせるように練習しましょう。」
イヨの教育係となったのは案内をした年かさの巫女だった。

「この宮には、さまざまな力を持った者がいます。“見える”者、
“聴こえる”者、“とべる”者、“動かせる”者。ほかに……
一人一人持っているものは違います。あなたはどうか“見える者”
のようですね。」

イヨは幼い頭で必死に話を理解した。

同時に、自分と同じように力を持った者がいることに深い安心と少しの恐怖を感じた。イヨは“視た”ことはあっても、今まで“視られた”ことがなかったからである。

「あなたの今の力は制御できないため、視たくないものも視えてしまおうし、周りにも影響与えてしまいます。ですから、まずはそれをあなた自身で使いこなせるようにしなくてはなりません。それができるようになれば、壁を作って、“力”から自分を守ることもできるようになります。」

なるほど、自分の力を制御し、壁を作ることができたのでここで出会う巫女たちの“まとうもの”が視られなかったのかとイヨは納得していた。

「大丈夫、慣れたら呼吸をするように使いこなすことができます。
安心して修行にはげみなさい。」

「はい。」

イヨは年かさの巫女にならって一生懸命修行に取り組んだ。

結果、季節が一回りする頃には、随分と自分の力を使いこなすようになっていた。

イヨにとって、宮での生活は新鮮なものだった。すべてが初めての

ことだらけだった。

身の回りのことは、できる限り一人で行わなければならなかった。巫女は大きな宮の割に大勢とは言えなかったが、それでもさまざまなどころから、いろいろな力を持った人々が集まっていた。

少女と呼べるものもいたが、イヨほど幼い少女はいなかった。

しかし、周りの巫女たちもイヨをかわいがってくれた。

宮の中で巫女は巫女とそこで働くものとしか会話を交わすことができない決まりがあり、まだ巫女と認められていなかったイヨに話しかけることができなかったのだ、と後になって教えてくれたのは湯あみを手伝ってくれた巫女たちだった。

宮ににいるのは巫女とその世話をする者だけだった。

世話をするのは、代々この宮を守り支えることを生業としてきた宮^{みや}長の者が行っていた。

このときの宮長はヒヨウゴという男で、人好きのする優しい目をしたおやじだった。

ヒヨウゴは幼くして親元を離れたイヨをかわいがってくれた。

ヒヨウゴはイヨの遊び相手にと、自分の息子を宮につれて上がってくれていた。

ヒヨウゴの息子は力力といい、イヨの三つ年上だった。

いつも大人びて、しっかりしているイヨも、力力といるときだけは子どもらしくふるまうことができた。

もつとも、気の強いイヨにかかれば、泣かされるのはもつばら力力だった。

宮では修行のほかにもいろいろな仕事があった。

宮の生活は基本的に自給自足である。

食事の準備はもちろん、宮の掃除、洗濯。

宮で食べる野菜も米も、そこに住まう者たちで育てていた。

初めて見たときその白さに驚いた着物も、自分たちで織って作っていた。

持っている力だけに頼らず、「生きる」力が本当は大切であること。自分たちは生かされた存在であること。それが大巫女の教えだった。大巫女の教えの中、力を使わずとも自分たちができることは自分たちの手で行なわれていた。

お姉さんのような巫女に囲まれ、厳しいながらも充実した生活を送っていた。

イヨが24歳になった春、イヨは久々に大巫女に一人で呼ばれた。24歳とはいえ、この宮に来てもう20年。宮の中でも、若いながら古株となり、下の巫女の教育係も務めるようになっていた。

「失礼いたします。イヨでございます。」
膝をつき、扉を開け、頭を下げる。

宮で一番厳しく教えられたのは、力の使い方よりもむしろ礼儀作法だったように思う。

20年の生活ですっかりと身についたイヨの作法は完ぺきだった。

「おはいりなさい。」

顔をあげると、目の前には大巫女が座っていた。20年前と何も変わらないように見える大巫女。

しかし、二十年の間に美しい顔にも年齢が刻まれつつあった。

目を閉じているのは、視力がないせいだと気がついたのは、いつのことだったか。

大巫女もまた、“見える”者だった。

ふと、視線を横に移すと、大巫女のよこに控えていたのは力力だった。

一昨年妻を娶った力力は、ヒョウゴの後継として、宮の大切な仕事

にも従事するようになっていた。

最近、大巫女の側役も務めていた。

まるで本当の妹のように過ごしてきたイヨにとって、カカが大切なお役目を授かり働いている姿をみるのはうれしいものだった。

昨年生まれたカカの息子にも名をつけてほしいと頼まれてイヨは祈りの中でハヤテという名を授かり、そうつけた。そして、来春には次の子も生まれる予定である。

ハヤテの成長はイヨにとっても楽しみにしていることだった。

いつもなら、イヨをみて優しく目を細めるカカがこのときは厳しい表情で目を伏せている。

イヨは少し不思議に思いながら、正面の大巫女に視線を合わせた。

「イヨ、そなたこちらへ来て何年になるかの。」

いつもと変わらない口調で大巫女は言い出す。

「20年になります。」

ほほ笑みをたたえた、大巫女はそのままなんでもないことのように続けた。

「そうか、実はな、そなたを宮から出そうと思う。」

イヨは、驚きに目を見開いたがことばが出てこなかった。

(9) 旅立ち

(9)

「宮を出す。」

大巫女のその言葉にイヨの思考は止まる。

すぐるように力を見つめても、苦しそくに眼を閉じ顔を伏せたまま何も言ってくれない。

「な、・・・なぜで・・・しょうか。」

やつのことで絞り出したのは情けない声だった。

自分が、何か取り返しのつかない失態をした覚えはない。20年過ぎた宮を突然放り出されることに、想像もつかない恐怖を覚える。大巫女はイヨの心中を察するように優しく告げる。

「20年そなたはよく務めた。しかし、そなたには外の世界でさだめが待つという大きな役割が待っている。」

さだめ・・・自分の立っている運命の道の先がかすんでいくような気がする。

「そのさだめはこの国を左右するものだ。そのために宮を出てほしいのだ。」

イヨは自分の唇が震えるのをどうすることもできない。

大巫女がそういうということは、これは相談ではなく決定事項。

大巫女にはそのさだめがはつきりと“視えて”いるということだろう。

後は覚悟を決めるしかない。

イヨはゆっくりと気持ちを落ち着けるように息を吐きだした。

瞳を閉じて、20年で培った力を開放する。

深呼吸をしながら気持ちを集中させていく。

瞳の奥に小さな、小さな光が見えた。

その小さな光がだんだんと大きくなっていく。

自分が村らしきところで畑仕事をしている姿がぼんやりと見える。
機を織って着物を縫う姿。

人々に囲まれ、祈りをささげる姿。

小さき輝きを胸に抱く姿が見える。

その温かい輝きがだんだんと大きくなっていくのも見える。

走馬灯のように場面が小さく切り取られ見える。

ちぎられた場面は、浮かんでは消え、また浮かんでは消えた。

その温かい輝きが大巫女の言う“さだめ”であることが分かった。

イヨは息を小さくはきだすと、目をあけた。

覚悟を決めることができた。

「わかりました。しっかりとおつとめいたします。」

そう言つて、手をつき頭を下げる。

想像したよりもしつかりとした声が出たことにイヨはほっとしていた。

イヨの了解に、カカの顔が苦しげに歪む。

大巫女は、イヨが何を視ていたのか悟っているのだろう。

何も言わず、満足げに頷いた。

奥の座敷を辞し、長い廊下を歩いていると後ろからあわただしい足音が近づいてくる。

と、後ろから左腕をつかまれた。

「イヨ！」

振り返ると、やはり力力だった。

「どうされました。そんなに慌てて。」

「どうされたって……。イヨ、お前は本当に良いのか。この宮

を出ることになるのだぞ。」

「力力様、わかっておいででしょう。これは決定したこと。力力様も分かっておいでだからこそ、何も言われなかったのでしょう。」
責めているわけではないのだが、力力は眉をぎゅっと寄せてつらそうな顔をする。

「しかし・・・」

イヨは手を伸ばして力力のほほに触れると、寄った眉に指を滑らした。

「そんな顔しないでくださいまし。わたくしは大丈夫でございます。」

「力力はまぶたをあけると、イヨを見下ろす。」

「わたくしも一応、巫女でございます。自分の未来はよく視えはしませんが、大巫女様のおっしゃる“さだめ”はわたくしにも視えるのでございますよ。」

力力はイヨの頬を両手で包む。イヨは気持ちよさそうに目を閉じた。
「四つの頃から宮にいるお前が、本当に宮の外で暮らせるのか。」
力力はイヨを優しく抱き込んだ。

宮を離れるということは、この優しい腕も失うということ。

イヨはさみしさに、涙がこみ上げてくる。

しかし、イヨは涙を抑え込み笑顔を力力に向けた。

「大丈夫でございます。なにしろ、大巫女様のお墨付きでございますから。」

「・・・イヨ。」

力力はまるで親に捨てられた子どものようにくしゃくしゃに顔をゆがませた。

子どものころによく見た懐かしい顔だ。

「情けない顔でございますねえ。全く、兄さまは。」

懐かしい呼び方に力力の腕は強くなる。

「力力様、次のお子様の名前も必ずわたくしにつけさせて下さいましね。生まれたら、必ずお知らせくださいましね。」

「ああ、必ず。必ず。」

大人になり、泣き虫のムシは何処かに行ったかと思っていたのに、もうすぐ二児の父になるとは思えない声に微笑ましく思う。

「どんなに離れていても、お前はわたしの妹だ。幸せを祈っている。」

「わたくしもでございます。カカ様の幸せを祈っております。」

イヨが宮を旅立ったのは、それから七日後のことだった。

(10) 目覚め

(10)

目を覚ますと、見慣れた天井だった。

朝……。自分は何をしていたのか。瞬きを繰り返す。

長い、長い夢を見ていたような気がする。

自分ではない誰かになっていたような……。。

体全体がだるかった。ぐったりした気分だ。

カタン。

物音に気付き視線をずらすと、傍らにいたのはおばばだった。

「……おば様。」

シュカの声に気付いたおばばが、顔を覗き込む。

深く刻まれた皺が、心配そうにさらに深く刻まれている。

どうやら心配をかけたらしい。

「シュカ、目が覚めたかい。気分はどうだい。」

「私……」

「昨日、湖から担がれて帰ってきたんだよ。倒れたって」

昨日……。そうだ、あの時湖で二人組の男女に……。

ということは、今日は秋祭りか。半日くらい寝ていたのだろうか。

私は、なぜ倒れたのだろう。シュカはその時の記憶があいまいだった。

どちらにしろ、担いで帰ってきたのはあの二人組なのだろう。

あの二人は、どうしたんだろう。

シュカは体のだるさを振り切るように頭を振った。

起き上がろうと、降った拍子に顔にまとわりついた髪をのけよつとした。

持ち上げた手を見てぎよつとする。

指先まで、びつしりと赤い蔦のような模様が刻まれている。

まるで本物の蔦を真つ赤にしたように、うでにまとわりついている。シユカはがばつと起き上がると、両手を見まわした。

どちらの手にも、同じように蔦が刻みこまれている。

腕をまくるとその下も刻まれている。

シユカは自分の寝かされていた布団をめくって足を出した。

足にも蔦がびつしり這っている。

全身なのか……。

遠くの国ではまじないをする者に刺青をするというが、そんなものともまた違う。

「なに……これ。」

「大丈夫。お前さんに害をなすものじゃないよ。」

声のしたほうに顔を勢いよく向けると、そこには昨日の女が座っていた。隣には、男もいる。

男の顔が誰かに重なるような気がする。

にこにこ笑う女の横で、男はじつとシユカを労わるように見つめていた。

「見せてごらん、痛みはないね。」

女はそつとシユカに近付くと、シユカの腕をまくって蔦をみた。腕を持ち上げて、蔦の這った具合を眺めている。

この女は何なのだろう。この蔦のことを知っているのだろうか。それとも、この蔦にかかわりがあるのだろうか。

昨日、この女に触れた瞬間全身に何かが駆け巡った。

警戒心がシユカの中に芽生えた。その瞬間、うでの蔦がうごめいた。ぞわつとした感覚が腕をめぐる。

赤い蔦がさらに赤味を帯び、女の手に襲いかかるように伸びた。そこにいたみんなの息が一瞬止まる。

「いやあっ」

突然のことに、シュカのほうが驚き、手を胸元まで引いてしまった。手を引いた瞬間、伸びようとした蔦がゆらゆらとなびいてすっと腕に戻った。

何が起こっているのか。

自分の体はどうなってしまったのか。

腕を見ても先ほどと同じように腕にはりついている。先ほど動き出したのがうそのようだ。

シュカの頭の中は疑問だらけだった。

腕で自分を抱きしめる。何か言いたくてもことばが出てこない。

口がパクパクと動くだけだ。

口をあけたまま、くびを振っておばばを探す。

おばばはシュカのすぐそばで、心配そうにシュカを見つめていた。

おばばと目が合う。

「・・・おばばさまあつ。」

おばばは、小さく息をはくとシュカにじみ寄って肩を抱いた。シュカの背中に手を置いて安心させるようにトントんとたたいた。それからゆっくりと大きな円を描くようにさする。

シュカは幼いころに戻ったような気分だった。

「大丈夫。お前がどうかなくなったわけではない。」

おばばの胸に耳をつけて、規則正しく打つおばばの鼓動を聞いているとやっと自分が落ちていくのが分かる。

しかし、この全身の蔦は何なのか。

「この蔦は、シュカの背中にあった痣だ。」

私の背中にあった痣。痣はこんな風に動くもの？

「これは、痣ではない。もともと、痣ではなかったのだ。」

痣じゃないなら・・・。

「これがお前の持つものなのだよ。」

私の持つもの・・・。

「シユカ、きちんとお坐りなさい。」

おばは私の肩を離すと。向かい合って座るように促した。

シユカがおばに向きなおって座ると、ゆっくりと話し始めた。

(11) 真実

(11)

「シユカ、お前が拾われた子だということは、お前も知っているな。」

「シユカは小さく頷く。」

「実は、お前は拾われたのではない。お前はあるところから私がお預かりしたお子なのだ。」

「今まで、おばばが決して話したことがなかった自分の生まれについての真実。」

「14年前の秋。双子月が重なった晩の明け方。赤い輪がまだ水面に映る湖に一艘の船がついた。そこには、産着に包まれたお前が乗っていた。」

「シユカは、口の中にたまった唾をぐくんと飲み込んだ。」

「お前は、光に包まれていた。お前をつれてきたのがそこにいるハネだ。私は、さだめがやってきたことを悟ったよ。」

「シユカは、ハネと呼ばれた女をみた。ハネはにこやかにほほ笑み、頷いた。」

「お前には大きな力が宿っていた。しかし、ここで暮らすためにその力は大巫女様によって封じられていたのだ。それがあの桜の花びらのような痣だ。」

「シユカは自分の腰の中心を触った。もう花卉の形は無くなってしまったその小さな痣はここにあった。」

「しかし、お前の力は大きかった。年を取るたびに少しずつ大巫女様の封じを解き始めた。そのせいで痣が増えていったのだ。今の状態はもともとお前の力の状態なのだ。」

「シユカは自分の両腕をじつと見つめる。」

「おばば様。私の持った力って……。」

「うむ。私にもこれとは云えぬ。ただ、その蔦はお前を傷つけるも

のから守るであろう。また、今まで封じられていた力もこれから目覚めてくるのだろう。」

シュカはおばを見つめる。

「この時が来ることは最初から決まっていたことなのだ。」

「私はどうなるの。」

おばは一呼吸すると苦しげな表情で、しかし諭すようにシュカに告げた。

「シュカ。時がやってきたのだ。この二人はお前を迎えに来た者たちだ。」

「おば様。どういうこと？迎えて私は何処かに行くの？こんなものを持っていたから？」

シュカの気持ちが泡立つにつれ、また蔦がうごめいてきそうになるのが分かる。

「落ち着きなさい、シュカ。そこがお前の本来のあるべき場所なのだよ。」

「そんな……。」

おばの口調はいつもの通り優しい。しかし、シュカには聞きたくない言葉ばかりだった。

おばの横にずっとハネが座った。

「改めてご挨拶いたします。お久しぶりにございます。シュカ様。ハネは手について頭を下げる。」

「シュカ様に会うのは、14年ぶりにございます。シュカ様は大巫女様の手でこちらへお預けになりました。わたくしどもの宮では、シュカ様は朱月の巫女と呼ばれておいでです。シュカ様はこれから宮へお帰りいただくことになっております。」

宮……。朱月の巫女。大巫女様。

シュカにとって初めて耳にするはずのものばかりだ。

……しかし、その言葉をシュカは知っていた。

はっとしてシュカは後ろを振り返り男の顔をじっと見つめた。

「・・・カカ。」

その男の顔は夢で見た男の顔とそっくりだった。こちらの男のほうが幾分ふけているが。

すると男は膝をつき、頭を下げた。

「はじめましてシユカ様。とはいえ、あなた様が赤ん坊のころにお会いしているのですが。わたくしの名はカカではありません。カカは父の名です。わたくしの名はハヤテと申します。」

ハヤテという名を聞き、シユカの目が見開かれた。

ハヤテとは夢に出てきた名だ。夢の中でもカカの息子の名だった。

「シユカ様。カカの名前を知っておいでとなると・・・何かを“視”たのでございますね。何をご覧になりました。」

ハヤテが顔をまっすぐにシユカに向け、じっと見つめる。

「・・・夢を。」

カカは納得といったように頷いた。

シユカは振り向きおばを見つめた。

「いえ、あれは夢ではないのね。あれは・・・おば様の記憶。」

おば様の本当の名はイヨというのね。」

おばは目を閉じたまま、天を仰いだ。

「そうだ。私の真名はイヨという。私も宮から遣わされた人間だ。」

シユカは、先ほどの夢を頭の中で反芻した。

力ゆえに家族と別れたこと。宮でのはつらつとした様子。涙の別れ。もしかして、おば様はわたしのせいで宮を出なければならなかったの。」

おばが目を見開く。

「そんなことはない」

「でも、私がいなければカカともお別れしなくてよかったのでしょう?」

おばは苦笑いの表情で、しかし明るく言う。

「まいったね。そんなことまで視えたのかい。ここにすることも、

カカとの別れもお前のせいじゃない。」

「でも、宮にいたおば様は幸せそうだったわ。」

シュカの瞳には、大きな涙がたまっていた。ゆっくりとした瞬きとともに、ゆっくりとしずくが頬を滑って行く。

シュカの手を柔らかく、温かい手が包む。

「シュカ、確かにお前は“さだめ”だ。でも、宮では一生子など持てなかった私に、母親のまねごとをさせてくれたのはお前だ。私にとってお前は、いとおしい娘なのだよ。それだけは忘れないでくれ。私はこうしてお前に出会えて、幸せだ。」

もう一方の手で、シュカの涙をぬぐってくれるおばの手は、ささくれだつてあつたかくつて、シュカを一生懸命に育ててくれた手だ。この手にシュカは何度も助けられた。何度も愛された。シュカの大好きな手。

「おば様。どうしても行かなければだめ？」

「シュカ。このまま村にいても、今度は自分がその力について知りたくなるだろう。自分が何者なのか、その目でその耳で、その体で確かめるのだ。たとえ、“さだめ”であろうとお前の道はお前が決めなければならぬ。」

自分で決めてよいのなら、このままおばのそばにいたいという思いをシュカは口には出さなかった。

おばの言うことがきつとその通りになることはおばにはわかっているのだろう。

そして、シュカ自身にも今はもうわかってしまう。それは水のようにずっと自分にしみ込んでくるように“わかる”ことなのだ。

シュカは、おば、ハネ、ハヤテの三人がみえるように体を向きなおすと、手をついた。

「宮へ、まいります。自分の目で自分が何者か見極めたいと思います。」

シュカは、夢の中のおばの気持ちと自分が重なったように思った。

(12) 決心の後

(12)

大きな決心をして、シユカの心は少しだけ晴れやかになっていた。しかし、落ち着くとともに耳に入って来たのは村のほうから聞こえるにぎやかに人々の声や楽器の音だった。

そういえば今日は秋祭り、気づけばもう昼を回っている。村の広場ではきつと人々がにぎやかに食べ、飲んでいるのだらう。

この姿では、とてもみんなの前には出られない。シユカの胸に急激に残念さが沸き起こってくる。

「シユカ、準備をしなさい。秋祭りに行くぞ。祈りの手伝いをするのだらう?」

おばばはいつもの笑みで種かに語りかける。しかし、シユカは困ったように眉間にしわを寄せる。

「何言ってるのおばば様、こんな姿で村のみんなの前に出たらそれこそ秋祭りが台無しになってしまうわ。」

シユカは両手をおばばのほうにずいつと突き出すと、悲しみを我慢して明るく言った。すると、脇に控えていたハネがまた、近寄ってくる。

「大丈夫。わたくしにお任せください。その力は要はシユカ様がどう使いこなすかということなのです。コツさえつかめばひっこめることはできるんです。」

シユカは、ぱつと表情を明るくした。もしかして、秋祭りに行けるかもしれない?

ハネはさらに近付くとシユカの腕に触ろうとした。しかし、直前というところでなぜかとまる。

シユカが疑問に首を傾けると、ハネは真剣に言った。

「私を信じてくださいましね。わたくしのことを信じていれば、薦

は伸びません。この蔦はシュカ様の感情につながっているんです。

シュカ様が心安らかに保てれば蔦も安心して中心に戻っていきます。

「

シュカは、先ほどの取り乱しようを思い出し、少しほほをあからませた。そして、ハネをじつと見て神妙に頷いた。ハネも頷き返す。

「では、両手を私の手のひらの上においてくださいませ。」

シュカは言われた通りに手を差し出す。

「目を閉じて、背中のかなめに意識を集中させてください。」

目を閉じる。背中に意識を集中させると、腰骨のあたりがじんわりと温かいのが分かる。

「ゆっくりと呼吸を整えて、私の手から力が行き来しているのが分かりますか。」

シュカはゆっくりと頷いた。両手に意識を向けると自分の腕に何かが流れ出てくるのが分かる。まるでハネの両手が水源となつて、温かい原潜がコポコポと湧き出でいるような感じがする。それがハネの息使いに合わせて流れたり引いたりしている。

「では、私の呼吸に合わせて、自分のかなめの力をゆっくりと中心に集めてください。私の流れを頭に思い浮かべて呼吸があつたらできますよ。」

シュカはハネの言うように自分の背中のもう一度意識を向ける。体全体で流れを感じながら、温かい部分を自分の中に引っ張り込むように想像してみる。耳を澄ませて、ハネの呼吸に同調させる。

きっかけはさざ波のような感覚だった。

自分が息を吸うたびに、潮が引いて行くように背中のもやからおなかの下あたりへ温かくトロツとしたものが引き込まれ、たまっているような感覚がする。

ゆっくりゆっくりと潮が引いていく。

「そう、シュカ様上手です。」

ハヤテは、蔦がだんだんと戻っていく様子を不思議な気持ちで眺めていた。

宮の巫女たちと共に育ったハヤテは、もちろんたくさんの巫女の力を目の当たりにして来た。

しかし、シュカの持つ力は、力を持っていないハヤテを圧倒していた。力が引いていくのが、薦の様子からだけでなく、まるでシュカの周りの空気が冷やされながらシュカに集まっていくような感覚として伝わってくる。

しかも、ハネの呼吸に合わせるとすぐにコツをつかんだように力を体に収めていく。

力を収めていくシュカの表情は神々しく、まだ年端もいかない娘子のものとは思えないくらい艶やかだ。

ハヤテは、選ばれし巫女の力をはつきりと感じていた。

全部の力を体の中に収め終わるとき、シュカの体の中に小さなしずくがボタンと落ちたような気がした。

シュカはゆっくりと目をあけた。

もう、薦が体のどこにも出ていないことは目に見なくとも感覚でわかってしまう。しかし、目で見てやっと安心することができた。

「すごい……。」

本当に消えている。しかし、おなかの中に温かいものがたまっているのが感じられる。それがずっとゆらゆらと揺れている。

「素晴らしいですね、シュカ様。」

シュカはハネの方を向いた。ハネは満面の笑みでにっこりと笑っている。

「シュカ様、うまく行きました。しかし、秋祭りでシュカ様が感情を大きく揺らせばまだ不安定なその力は騒ぎ出すでしょう。できるだけ心安らかに、落ち着いて行動下さいまし。わたくしどもも一緒に緒らせていただきますので、何かあればお呼び下さい。」

感情が揺れ動けば騒ぎ出す。シュカはおなかのとなりと揺れる力を感じながら、なるほどと思った。水のようにだと思っていたが、それはまるで獣を体の中に飼っているようなものなのだ。

シュカは、力強く頷いた。

この日のためにと織った羽織の下に、念のため少し長めに腕を隠してくれる下袖をきた。腰には、ノノ姉の深緑の地に鮮やかな黄で織られたシュカの花の意匠がとてもすつきりと見えるその羽織は、シュカに大変似合っていた。秋になると湖畔に多く咲いている朱花の花を髪に飾ると大人びた女性の雰囲気も醸し出された。

おばはシュカに薄く紅を塗ってやると、ほほ笑んですっかりと頷いてくれた。

「よく似合っている。今日は、おばの手伝いが終わったら、思う存分楽しんでおいで。」

シュカは、くつと頬を持ち上げ、今日一番の笑顔を作って見せた。

「ありがとう、おば様。」

シュカにはこの村で秋祭りに参加できるのが今日で最後なのだという予感があった。

今日の日を忘れられない思い出にしよう。シュカは心にそう誓っていた。

(13) 宵の宴

(13)

秋祭りは盛大だった。

遅くなって秋祭りに現れたシュカを目にした人々は、シュカのまとった空気が変わったことに驚いていた。シュカは娘たちから、きつと良い恋に巡り合ったのだろうと話を聞こうとシュカに詰め寄った。友だちから、今日がとても美しいと褒められたシュカは恥ずかしさに頬を染めた。恋のうわさを否定しつつ、盛り上がった。

かなぎの祈りの後、おばは村長にシュカが村を出ることを伝えた。

占いで、遠方の知り合いのもとに修行に出ることが吉と出たからだと説明をした。すでに迎えの者が来ていると、ハヤテとハネの二人も紹介された。

背が高く整った顔をしたハヤテと不思議な色気を持ったハネは、村人の中で大いに目立っていた。

おかげで宵の宴は、急きょシュカの送別の宴と変わった。娘たちはシュカを取り囲み口々にさみしくなると別れを惜しんでくれた。機織り場の奥さまがたは、優秀な機織り手を失うことを残念がってくれたり、娘くらの年の子を一人修行にやることを辛く感じてくれたりした。年頃の娘たちの中にはシュカの手を取って泣き出したのはいいが、泣きやんでくれない子もあった。

せっかくの宵の宴を台無しにしてしまったのではないかと思ったが、みんなが言ってくれる言葉にはみんなの温かい思いが込められていて、シュカを心から喜ばせてくれた。

みんなの温かい気持ちを受けるたびに背中 of 痣が熱くなるような気がした。

ヒマリには複雑そうな顔で悪態をつかれたが、きつときつと戻ってきてねと抱きしめられた。

泣かないわと言いながらも、目を真っ赤にして涙をこらえているヒマリの横にはちゃっかりとセンジが

立っていて、ヒマリを心配そうにうかがう姿は素直にうらやましく思った。

みんなに笑顔で別れを伝えることができていたシュカだったが、旦那さまと一緒に来ていたノノ姉の顔を見るとさすがに涙がこみ上げてきた。シュカは幸せいっぱいノノ姉の表情を曇らせることが忍びなかったが、決心に揺らがないシュカの表情を見てとったノノ姉から優しく微笑まれると我慢していた涙がこぼれてしまった。

「本当に遠くへ行ってしまうのね。シュカ、私が婚礼の時に言った言葉はずっと変わらないわ。どんなに遠くへ行ってもあなたは私の可愛い妹よ。」

「ありがとう。」何度もそう口にして、ノノ姉の言葉をシュカは改めて胸に刻んだ。

意外だったのは、男の子たちの反応だった。

娘たちの輪が薄くなると、今度は男の子に囲まれた。さみしくなるねと笑顔で言うもの。どうして行っちゃうのとさみしそうに言ってくれる子さまざまだった。

何人かからは、今日は思いを伝えたかったのに・・・と残念そうにされ、思いもよらなかったシュカはどうこたえていいのか困ってしまった。顔を真っ赤にしてうるたえるシュカの隣には、「やっぱりね。」と言わんばかりのヒマリがいて、呆れながらも男の子たちを上手にあしらってくれた。

ヒマリに小さな声で「ありがと」といったが、ヒマリから「帰ってくる頃にはもうちょっと色恋に慣れているといいわね。」と言われ小さく頷いたものの、帰ってくる日がないかもしれない現実に複雑な気持ちになるシュカだった。

秋祭りは本当に忘れられないものとなった。なにより、想像以上に村のみんなから愛情をかけられたことを知り、シュカの胸は感謝の思いでいっぱいになった。

みんなの思いをことばや態度で受け止めながら、シュカは自分自身がんばだかんだ言って、拾われっ子だったことを引け目に感じていたのだと気づいた。みんながそれほど自分を惜しんでくれるなんて思っていなかったからだ。みんなが受け入れてくれているとは分かっているつもりだったのに、どこかで自分の方が壁をつくっていたのだなと村で過ごし時間を反省した。

おばがシュカに伝えてくれた大切な言葉、みんなが村全部で本当はシュカを包んでくれていたという事実、この村で培い学んできたことすべてがシュカにとつての宝物であり、これから何が待ち受けているかはわからないけれどこの宝物があればどんなことでも乗り越えていけそうな気がした。

宵の宴がお開きになり、シュカはひとり湖のほとりに歩いてきていた。

おばは早々に家に帰っていたし、お開きになってからもシュカに付き添ってくれていたハヤテにもお願いして、先に家に帰ってもらった。

湖にたどり着いたシュカはいつもの通りほとりに腰を落とした。シュカは湖の淵にしゃがみこむと目を閉じ、手を合わせた。

「美しき双子月さま、豊かな湖の神様^{シユイ}、ひと時ここで休むことをおゆるしてください。」

祈り終わって草むらに背中を横たえると、頭上には満点の星が輝い

ている。今日は双子月が離れて輝いていた。

秋の明星は、西の空に蒼く光っている。それに小さな光が寄り添うように光っている。

明星は世を見守る隼。^{ハヤブサ}小さな光は隼をのせた風。幼い頃におばばに聞いた言い伝えを思い出した。

その昔、日照りが続き木々が枯れ落ちて、作物も朽ち、この世が乱れた。そのとき隼が舞い降り、風を起こした。その風によって争う人々や崩れた街並み焼け落ちた家々を吹き飛ばした。

何もなくなつた世界に隼は真つ赤な実を銜^{くわ}えて再び舞い降りた。真つ赤な実は熟し大地に種を落とした。種から芽が芽吹くと大きな大木へと育ち、多くの実を実らせた。

やがてその木の周りに豊かな森が生まれると、人々は森に帰つてきた。隼は風に乗ると、空高く舞い上がり西の空に消えた。

おばばにかかれば古の物語もまるで視てきたように語られる。布団の中でおばばの語る物語に夢中になつた幼い日々が懐かしい。

風が随分冷たくなつた。宵の宴で暖まつたからだだが信まで冷える前に帰らなければ心配をかけてしまう。

もうすぐの別れに向けて、トウヤに会いたかった。こんな時に限つて会えないのか。

これ以上は待てない。残念だが別れまでにまた会えるといいのだが。
・・・

シユカは立ちあがると、もう一度湖を見渡した。

ここにはたくさんの思い出がある。初めて水くみをしたときは、桶が重くてよろけた。

泣きたくなつた時は必ずここにきて泣いた。トウヤに優しく頭をなでられると心がいやされた。

シユカにとってはここが原点だった。

(14) おばとの別れ

(14)

旅の支度を終え、出発を迎えたのはそれから三日後の朝だった。結局三日間、トウヤには会うことができなかった。

その日は、朝からよい天気で太陽が秋の高い空を暑いくらい照らしていた。

出発の湖には、この三日の間にハヤテがどこからか調達してきたらしい小さな木製の帆かけ船が浮かんでいた。ハヤテは旅の荷物を船に乗せている。

シュカの荷物は身の回りのこまごましたものだけでとても少なかった。あとは旅に必要なもの。小さな布袋を背中に担いでいたシュカは、布袋を肩からおろすとそれをハヤテに渡し、湖のほとりに跪いた。

頭を下げで湖に最後の祈りをささげる。

「豊かな湖の神様^{シェイ}、わたくしは本日この村を出ることになりました。シェイ様とこうして過ごすのも今日が最後です。どうか、シェイ様のご加護をくださり、無事に目的地まで到着できますようお守りくださいませ。」

シュカは地面に両手をつくとゆっくりと水面に口づけた。

すると、シュカの腕からすると鳶が伸び、まるでシュカにならって口づけをするように地に向かい、温かいものを地面と交信するのだった。

三日間、ハネについて鳶の制御の仕方を教わり多少のことでは動かなくなっていた鳶の初めての行動だった。自分の心と連動しているということは、祈りの気持ちを通じているということか。

驚くことに、力が解放されたからかシュカには湖の神さま^{シェイ}の気配を感じるができるようになっていた。湖を見渡すと、晴れきった空の下に目には見えないが湖を覆う靄のようなものを感じる。その靄

は湖一帯を守っているような気配がした。

「おば様の言うとおりだわ、神さまに守られていたのね。」
シュカはもう一度祈ると、立ち上がった。

この船に乗れば、もう二度とこの地に帰ってこれないかもしれない。そう思うと一步を踏み出すのにずいぶん躊躇してしまう。

「自分で決めたことじゃない」シュカは心の中で自分を叱咤した。そんなシュカの手をそつと握ってくれたのはおばだった。

「・・・おばさま。」

「シュカ、いつでも、いつまでも、どこでもお前の幸せを祈っている。お前は必ず幸せになるんだから。いつか、帰ってくればいいんだ。」

シュカは目にいっぱい涙を浮かべる、伝えたいことは山のようにあるのにうまく口に出すことができない。一番、一番伝えたいのは何だろう。何だろう。考えれば考えるほど涙がぼろぼろとこぼれてきた。

「ありがとう。私を育ててくれたのがおば様で本当に良かった。」
やつとのことと言えたのはそれだけだった。

おばに促されてやつと船に足をかけた。船にはすでにハヤテとハネが乗っていて、ハヤテが手を伸ばしてシュカの腕をとる。おばはハヤテに握っていたほうの手も預けると、水際から離れる。揺れる船に体制を崩しながらも乗り込んだシュカは体をおばのほうに向けて泣き笑いの顔で言った。

「おば様、私もずっとおば様のこと祈っています。どうか、どうかお元気で。」

最後までにつこりと笑顔をたたえているはずのおばの顔は涙で歪んでよく見えない。

「ハヤテ、ハネ。シュカをよろしく頼みます。」

いつものように背筋を伸ばした凜としたおばの姿がそこにはあっ

た。

「はい、イヨ様。」

「お任せください。」

「では」

ハヤテの合図で船がゆっくりと漕ぎ出された。

湖を悠然と進んでいく。

サヨナラおば様。サヨナラノ姉。サヨナラ村のみんな。サヨナラトウヤ。心の中でシユカはずっとずっと別れと祈りの言葉を繰り返す。

薫がシユカを労わるようにさっきおばばが握ってくれていた手に這う。

うるんだ瞳の向こうでおばばの影がだんだんと小さくなっていった。すっかり見ていたいのにはやはり涙に邪魔されて見えない。

やがて、川に入ると小さくなった影は全く消えてしまった。

イヨは、シユカの帆船が見えなくなるまでそこに立ち、ずっと帆船を見つめ続けた。

やがて、船が天のようになり、湖の向こうの川に流れ消えてようやうく、笑顔を解き、泣き崩れた。

それは、村にやってきて約40年、イヨが初めて流す涙だった。

さだめを受けるために宮を出て、シユカを授かった。しかし、いつの間にか、いやシユカに出会って間もなくにはイヨにとってシユカはもう唯一無二の存在となった。

家族のもとを離れ、諦めていた家族を持てたこと。

シユカがイヨに与えてくれたのは、深い喜びとかけがえのない存在だった。手放したくなかった。

その感情を持つてはいけない、そう思ってもあらがうことのできなかった思い。

イヨは太陽が真上に上りきるまでその場を動くことができなかった。ただひたすらに、シュカの歩む道がシュカを苦しめないことを祈るばかりだった。

シュカは、湖を抜け川に入っようやく涙をこぼすのを止めることができた。

真っ赤に腫れた瞼を川の水で濡らした手拭いで抑えるようハネに言われ、目に当てた手ぬぐいの心地よさに心も落ち着いていく。

シュカは手ぬぐいを下ろすと、流れゆく景色を見た。大きな川をハヤテがこいでゆく。

川岸の近くまで茂る森から、鹿が顔をのぞかせている。大きな丸い瞳がかわいらしい。

「シュカ様、14年前イヨ様のもとへシュカ様をお連れした時もこの川を通ったのでございます。」

ハネが教えてくれる。赤ん坊のころのことなどもちろん覚えていない。懐かしさもない。

しかし、シュカは風を受けて進む帆船の揺れを感じながら、まるでゆりかごのようだと思っていた。

（15）外の世界

（15）

今朝、村を発つてからずっと船の上にいた。

シユカは陽の光の下で、川岸に流れる風景をずっと眺めていた。

14歳になるまで村を出たことのなかったシユカにとって、船から見えるものすべてが珍しくいろいろなものに興味を持った。

森を抜けて初めて見る植物や動物を見つけてはハヤテやハネに尋ねたりしていた。

しかし、それから目にし始めたものにシユカは次第に言葉を失っていった。

シユカが育った村は、おばばがかんなぎを務めるようになってから大きな天災に会ったことがなかったため、凶作に陥ったり洪水や戦禍に巻き込まれたりしたことがなかった。

さらに30年前から始めた養蚕と機織りによって、作物だけではなく現金の収入も得られるようになりひとを減らすことなく冬を越せる豊かな村となった。

シユカはそれが当たり前で育ったため、多少の差があったとしても違いを感じたことがなかった。

しかし、どうだろう。川岸の向こうに見たのは、シユカの知っている『村』とはいいい難い光景だった。

痩せた大地に細々と田畑を耕している人びと。こんなに大きな川が流れているのにどうしてこんなにも土地がやせているのだろう。

また、別のところではかつて畑だったのだろうところが荒れ果て、人の気配がなくなっていた。

太陽が真上に上がり、腹も減ってきたので食事をとることにした。

近くに町のあるあたりまで船を進めて川岸に固定する。

木にくくりつけた奈和がほけないことを確認すると3人は船を折り町に向かつて歩いた。しかし、そこでシユカは初めて目にする光景に愕然としてしまった。

崩れ落ちた家々、生気を失った人々。黒く焼け焦げた様子から、その村が戦火に飲み込まれたことが分かる。何軒が残った建物で人びとは店を出していた。旅相手のそこに集う人は多くなかったが、厨房の中から活気のある声も聞こえてきていた。

街にいる人々は誰もが疲れ果てて見えた。

シユカはその光景に、おなかがすいておいしいはずの料理もあまり味を感じることができなかった。

店を出ると4、5歳くらいに見える男の子がしゃがみこんでいた。

落ちくぼんだ目をきよきよと動かして物欲しそうに上目づかいにシユカを見た。きつとおなかがすいているのだろ。しかし、シユカにはどうすることもできない。

シユカが思わず左手を伸ばして、男の子の頭をなでると手を伝わって電気が流れ込んできた。

ひゅつと一瞬にして左手の指先まで蔦が伸びる。「まずい」シユカが手を引くより早く、シユカの脳裏に男の子の記憶が流れ込んできた。

逃げ惑う人々、街に放たれた火。飛んでくる火の子が頬に熱い。自分は必死に走っていた。

自分の手を引いて逃げようとしているのは母親。しかし、多くのひづめの音とともに四方から矢が飛び交う。恐ろしくて、自分の手を引く母親の背中を必死で見つめていた。しかし、その背中に矢が突き刺さる。2、3度母親の体が傾くと前のめりに倒れた。

倒れた母親に必死にしがみつく。母親は口をあけ苦悶の表情を浮かべながら自分を立たせ逃げるように言う。その表情がどんなに怖くても、足がすくんで動くことができない。

蹄の音はさらに増える。

母親はいずるように道のわきに動くと少年を抱え込んで焼かれていない建物の影に倒れた。

だんだんと聴こえなくなる息遣い。男の子は母親の呼吸が全くしなくなっても、その体から鼓動が聞こえなくなっても、体がだんだんと固く冷たくなってもずっと母親に抱かれたまま動かなかった。

二晩、そうして過ごし建物から出てきた男に引つ張り出されるまでずっと動かなかった。

「い、いやああああ。あああああ。」

シユカは振り払っても止まってくれない頭の中の映像に叫び声をあげた。

頭を抱え、目を見開くと、感情の見えない男の子の目にとらえられる。

シユカは一人駆けだした。全力で。声にならない叫びをあげても、記憶は消えない。

「シユカ様！お待ちください。」

ハヤテの静止の声も、シユカには全く聴こえていなかった。

船の留めてある川岸につくと、シユカは膝を折り両腕を抱えて崩れ落ちた。

息が上がって、激しい鼓動。上手く呼吸ができない。

すぐ後ろをハヤテとハネが駆けてくる。嗚咽を漏らすシユカの手前で足を止めると、ハネがゆっくりとシユカに近付き背後からすっぴりとシユカを抱きかかえた。

ハネはシユカの背を自分に持たれかけさせ、指先が白くなるほど強く握りしめた両手に手を重ねるとゆっくりと指をほどいた。

そして、シユカの耳元で小さくくりかえした。「大丈夫。大丈夫。

大丈夫。大丈夫。……。」

シユカの頭の中で繰り返される映像に、徐々に声が重なる。「……

「……だい……。だいじょ……。大丈夫。大丈夫。」

ひっひつと短かった呼吸がだんだんと長くなっていく。

それとともにシユカは暗闇に落ちて行つた。

シユカの呼吸が落ち着いてきたのを確認すると、ハネはハヤテにシユカを預け船に横たえた。

「大丈夫なのか、ハネ。シユカ様はどうされたというのだ。」

ハヤテはシユカの額に浮かび上がった脂汗を自分の袖口で拭きながらハネに問いかけた。

「第滋養部出す。直に目が覚めるでしょう。体の方は問題ありません。鳶も暴走しませんでしたし。しかし、心のほうは……。」

ハネも心配そうにシユカを見つめる。

「たぶん先ほどの子どもものつらい記憶を視てしまったのでしょうか。」

力が強すぎるため、相手の強い気持ちを呼びこんでしまうの。おそらくあの子は戦で親を亡くした孤児でしょうから……。」

「力は制御できるようになったのではないのか。」

「そう簡単にはいきません。鳶が出ないように抑えることができるようになっただけです。いくら表面上にそれを隠しても、内には力をためているということなのです。直に触れると相手の思いが強い分それを受けてしまうのです。」

ハネは強い目をしてハヤテを見た。

「ハヤテ様。お疲れだとは思いますが、一刻も早く大巫女様にお目通りするのが良いかと。先を急ぎましょう。」

「うむ。わかった。」

ハヤテはいったん船を降り、くくりつけた縄を解くと、船に飛び乗った。

櫂を持ち直し、櫂を川岸の岩に掛け勢いをつけて船を出した。

太陽が沈みきるまでには、何とか着きたい。ハヤテはそれまで以上に櫂をこぐ手に力を込めた。

(16) 到着

(16)

シユカが自分を取り戻すと、あたりはうす暗くなっていた。

この前と違い、状況はすぐに思い出した。どうやら男の子の記憶に飲み込まれていたことも、また気を失ってしまっていたことも。

「あら、気が付かれましたね。」

声が聞こえ、目線を上げると真上にハネの顔が見える。頭の感触から言つて、どうやらハネの膝の上に頭をのせて寝ていたらしい。

「あつごめんなさい。」

いつからかはわからないが、男の子にあったのが昼過ぎだったということは長い間意識を失っていたらしい。慌てて膝から退こうとするシユカをハネは肩を押さえてとどめた。

「大丈夫よ。心配しないでください。そのままです。もうすぐ宮の入口の川にたどり着きます。」

シユカは、船の縁の向こうを見た。上の方しか見えないが、木々が茂り森の奥に進んでいるように見える。やがて、本流から細い支流へと分け入った。

細い川の両側から木がかぶるように生え、川の行く先を隠すようにしている。

徐々に深くなる木々が突然開けたかと思うと、広々とした湖に出た。村の湖を思わせるように周囲は森に囲まれている湖を突っ切るように船は進んでいった。

「ハネ様、起き上がって景色を見てもよいですか。体はもう大丈夫ですから。」

ハネがにつこりと笑って頷くのを確認すると、シユカは船を揺らさぬよう慎重に起き上がった。

湖を囲む木々には知らないものもあるが、全体的な雰囲気は村の森

に似ている。

「シュカ様、宮が見えてきましたよ。森の少し左上を見てください。赤い屋根が見えるでしょう。」

ハヤテが振り向いて、左側を指差した。シュカは背後から少し身を乗り出してうす暗い湖の向こうに目を凝らした。

豊かに茂った森の上に赤い屋根が頭をのぞかせている。岸から少しのぼったところだろうか。

遠くに見えてきたそれが近づくにつれ、その大きさが分かり始めた。想像していたよりもかなり大きい。

というか、こんなに大きな建物これまでの道中にも目にしなかった。と言っても半分は倒れていたのを見ていないが。もちろん村にもない。

「すごい……。こんな大きな建物生まれて初めて見ました。」

啞然と見上げるシュカに、二人がくすくすと笑う。

「厳密に言えば、初めてではありませんが。まあ、記憶はありませんわね。」

そうか、自分はここに“戻って”来たのだったなとシュカは思っていた。そりゃ記憶なんてあるはずない。ハネの話では、シュカが宮を出たのは生まれて一カ月たたない間だったというのだから。

そんなことを考えているうちに岸に着いたようだった。棧橋がつくられている。ハヤテが軽やかに棧橋に飛び移ると縄をかけた。一日船を漕いでいたというのにすごい体力だ。シュカはハヤテの強靱な肉体に感心していた。

「シュカ様、こちらにどうぞ。」

ハヤテがシュカに手を差しのべた。シュカは手を伸ばそうとして、昼間のことを思い出し躊躇してしまう。するとハヤテの手ですでに降りていたハネもシュカに手を差しのべた。

「大丈夫でございます、ハヤテ様は何にも考えておりませんから。ご心配ならばわたくしの手をどうぞ。」

「なにつ、ハネ。失礼な。そういう言い方をするとまるで私が馬鹿みたいではないか。」

「あら、そうはいつておりませんよ。ハヤテ様は安全だと言ったのです。」

シユカはこのやり取りに思わず吹き出してしまった。二人が自分に気を使ってくれていることが伝わってくる。シユカは自分の両手を二人に差し出した。

ふたりはシユカがどうして倒れたのか、何を恐れていたのかわかってきているのだ。自分が二人を怖がることはない。

二人は笑顔を浮かべて、同時に勢いよくシユカを棧橋に引き上げた。勢いが余ってシユカは二人に抱えられる形になってしまった。

「ありがとうございます。」

シユカの言葉に二人は無言で笑顔を向けてくれた。

「さあ行こう。」

ハヤテは船に残った荷物を担ぐと、先導して歩き始めた。

シユカはハヤテの後ろを、シユカの後ろにハネがついてくる。船の上で見えていた宮は、森に隠れて見えなくなっていた。

森の中に宮へ上る階段がついていた。一段ずつ板で補強してある階段はとても歩きやすいが、階段はるか先まで続いている。

階段の中段程に差し掛かったころだろうか、宮が再び姿を現した。大きな赤い柱に白い壁。屋根も赤く染まっている。空につき立つように背の高い建物だった。そして広い。

シユカは不思議と懐かしさを感じていた。こうして立ってこれを見上げるのは初めてのほうである。

「そうか・・・おば様の夢で見たのか。」

入口は大きな門だった。二本の巨大な梁を二本の足で支えている。足は大人二人でやっと抱えられるくらい太いものだった。

門の前に立って、くぐる前に前後の二人が足を留めた。

「シユカ様。こちらが宮でございます。この鳥居をくぐる前に申し

上げなければならぬことがございます。」

ハネがシユカの前に回ると、神妙な顔で告げた。

これは門ではなくて、鳥居というのか。シユカは、ぼんやりとそんなことを思ったがハネのその神妙な顔を見て気を引き締めた。

「これからシユカ様は大巫女様にお会いしていただきます。大巫女様はこちらの宮を守っておられる方です。この宮に住まう巫女は大巫女様に仕え、修行に励んでおります。しかし、大巫女様にお会いするためには楔を行わなくてはなりません。そして、ひとつ決まりがございます。」

シユカはハネを見据え言った。

「一言も口を利用してはならないのね。私がまだ大巫女様から巫女と認められていないから。」

ハネは一瞬驚いたそぶりを見せたが、やがて納得の表情を浮かべた。
「ああ、イヨ様の記憶を視られたのでしたね。その通りでございます。わたくしも旅を終えて楔を受けなければならぬため、ずっとそばにすることができません。ハヤテ様もでございます。中に入ったら次にお会いするのは大巫女様の部屋でしょう。それまで別のものがつくことになります。どうかご承知ください。」

「大丈夫です。一応覚悟してきたのですから。」

不安がないわけではないが、大丈夫。シユカはほほ笑んで見せた。

「力強いお言葉安心いたしました。」

「ではシユカ様、わたくしもここで失礼いたします。わたくしはこの鳥居をくぐることはできませんので。またあとでお会いしましょう。」

ハヤテはそういつときびすを返して荷物を持ったまま階段を下りて行った。

「ハヤテは男性ですので別の入口から宮へ上がるのです。御心配はいりません。荷も後で届きます。」

心配げな表情に見えたのかハネがシユカの肩をとんと叩いた。

「では、私たちもまいりましょう。」

シユカは、ハネに促され大きな鳥居をくぐるために一歩を踏み出した。

（１７）大巫女との対面

（１７）

宮は夢で見た通り、長い廊下には真っ赤な柱がずらつと並んでいた。夢よりも年季が入っている様子にシユカは違和感を覚えたが、夢で見たときよりも４０年以上たっているのであれば仕方のないことであると納得した。

逆にいえば、４０年以上たってもほとんど変わらないほど宮の中は美しく手入れが行き届いていた。

無垢に近かった床板や戸は深みを帯びた色へと変化していたが、磨きあげられ光沢を放ちより威厳を増していた。シユカはここで過ごしたわけではないのに、自分の中にこの風景の記憶があるのがなんだか不思議な気分だった。

そして、初めての湯あみ。

温かい湯につかるというのは存外、何ともいえず気持ちの良いものであったが、人の手を借りて支度を行うのは慣れず、恥ずかしさに身の置き場がなかった。

しかし、真っ赤な袴に白い着物を身につけると不思議と背筋が伸び気持ち良くなっすぐなりうつむいていた顔も上がった。袴の腰に、組紐を通す。この宮を出たときにシユカが巻いていたものと同じ意匠の組紐は、ノノ姉が贈ってくれたものだ。

シユカは自分の頬を両手で挟んで軽くパンパンとたたいた。

「よしっ」

覚悟を決めると、シユカは大巫女に会うために廊下に出た。

案内されたのは、長い廊下の一番奥。小さな引き戸の部屋だった。案内してくれたのはシユカと年の変わらなそうな巫女だった。巫女にならって、廊下に膝をつき正座をすると、戸が開けられるまで頭を下げて待った。しゅつと戸を引く音がする。

「入りなさい。」

シユカはうつむいたまま座敷に入ると、さつきと同じ姿勢をとった。
「顔を上げなさい。」

耳に聞こえる声は深い湖のように落ち着いていて重い。シユカは顔をあげると目の前の人をしっかりと見た。

銀に染まった床に流れる長い髪。まっすぐと伸ばされた背筋。真っ白な着物と同じくらい白い肌に刻まれた皺は深い。真っ白な雪の上に落ちた寒椿の花びらのように紅い唇。そして、閉じられた瞳。

その人はシユカが予想していたよりも随分と年をとっていた。しかし、おばばが幼少のころに見た姿と変わることのない美しさ。

その人を見た瞬間、シユカの背中はずわわとうごめき始めた。

シユカは必死に自分の気を静めた。ゆっくりと呼吸し、細く長く息を吐く。

そうしている間もシユカは大巫女からめを離すことができなかった。

「よく帰ってきた、シユカ。大きくなったな。・・・そのまなざしの強さ。イヨによく似ておるな。」

「おば様のことを覚えておいでなのですか。」

「むろん、忘れはせぬ。それに、この宮を出てもイヨのことは視ておった。」

大巫女は“視る”もののなか。シユカは、大巫女が一度も瞼を上げずにしゃべっていることに気付いた。

「そなたの考えた通りじゃ。わしの目は何も映さん。しかし、わたしには実にたくさんのが視えた。そなたの顔は見えんが、表情や目線、その強さは視ることができる。」

シユカはじつと見つめたまま、頷きもせず、ほとんど瞬きもせず聞いた。

背筋に汗が流れる。

「そなたはこの宮を離れていた分、これからこの宮で知ることが多くあるだろう。」

「大巫女様、わたくしはここで何をすればよろしいのでしょうか。」
「何をするかは、定まっておる。運命とは天命だ。まずはこの宮でその力を磨くことからだ。」

“ 何をするのか ” 上手くはぐらかされたような気がする。それとも自分にはわからなかっただけか。

おばの言っていた『さだめ』がその天命ということだろうか。

そんなシユカの考えが視えてしまったのか、大巫女はにやりと笑った。

「心配ない。運命は道に過ぎん。そこをどのように歩くのかはそんな次第だ。ここではどう歩くかを選べるよう準備をするのだ。さすれば自分のすべきことを自分で見出せる。それにそなたにはたくさん道の標が見つかる。」

大巫女の言うことは何か輪郭がはつきりせず、正直シユカには理解が難しかった。しかし、これからの自分にとってここでの修行が役に立つということは分かった。

シユカが聞きたいことはたくさんあった。しかし、シユカが今それを問うてもシユカにわかるように大巫女は答えてくれないだろう。

まずは、それが分かるように伸びるということか。

自分の人生がこの人の手の上で転がされているような気がする。でも自分が未熟であることは自分でもわかっている。自分は自分を見極めに来たのだ、まずはここでの暮らしを受け入れ、自分を見つめることが必要なのだとシユカは考えた。

せめてもと意地だけは見せようと、シユカは絶対に大巫女から目を離さないようにまなざしを強めた。

「失礼します。」

シユカの入ったと戸は別の戸から声がした。

大巫女は、シユカの方を向いたまま返事をした。するとそこから現れたのはハネだった。

「大巫女様、遅くなり申し訳ありません。」

「構わん。ハネ。こちらに参れ。」

ハネは音をさせず座敷に入ると、静かに戸を閉め大巫女とシュカに向きなおった。

シュカと目のあったハネは、シュカを安心させるように目だけでほほ笑んだ。

ハネは、シュカや大巫女と違い、赤い袴ではなく濃い藍色の着物を着ていた。

「大巫女様、シュカ様をお迎えする準備ができました。」

大巫女は満足げに頷くと、シュカに言った。

「シュカ、しばらくの間ハネに付いて学ぶとよい。あとはハネに聞きなさい。」

シュカは、頭を下げてハネとともに座敷を辞した。

ハネに連れられて部屋に着くと、やっとシュカは息をつくことができた。

「ふうっ」シュカは座敷にへたり込んだ。

自分が思っていたよりも随分と気をはっていたらしい。湯あみをし
てさっぱりしたはずが、汗に濡れて背中に着物がはりついていた。

(18) 面会の後

(18)

「シュカ様、大丈夫でございますか。」

ハネが心配そうにシュカを覗き込む。

「はい。大丈夫です。」

シュカは慌てて、座りなおし背筋を伸ばした。ハネに出会ってから、ずっと心配ばかりをかけているような気がする。

「それは良かった。随分強行でまいりましたので、お疲れかと思えます。あまり、我慢せずおっしゃってくださいね。」

温かい言葉に目元が緩みそうになる。

「ありがとうございます。情けないですね私。」

こんなことではだめだ。シュカは、すぐ泣き虫になった気分だった。村ではしつかり者と言われていたシュカが、この数日間はそのことで弱気な自分が顔を出す。

「そんな顔しないで。シュカ様、大巫女様を目の前にしてよく薦を伸ばすのを抑えられましたね。それだけでもすごいことです。自信を持って笑って下さいまし。しかし、まずはその汗びっしりの背中を拭かなくてはなりませんね。」

ハネにはなんでもお見通しなのだろう。今は、ハネの優しさがありがたいばかりだ。

シュカは帯を解くと、背中の際間に手ぬぐいを入れ背中を拭いた。そういえばと、シュカは疑問に思っていたことを口にした。

「ハネ様。ハネ様はどうして私と違う召し物なのですか？」

ハネは、少し驚いてシュカに笑いかけた。

「そういえばお話していなかったですね。私は、巫女ではないのです。」

シュカはきょとした。

「えっ、だってハネ様は力をお持ちですよ。」

「ええ、私は力を持っています。正確に言えば、私はもう巫女ではないのです。実は、宮を出るときに巫女をやめたのです。」

宮を出たとき……。

「それって……。」

「違います、シユカ様を宮からお連れした時ではありません。もっと前に結婚のために宮を出たのです。」

シユカはほっと胸をなで下ろした。

「宮を出ていた私ですから、シユカ様をイヨ様のもとへお連れする使命をいただいたのですよ。」

おばがシユカのために宮を出されたことを考えるとほかの誰かの人生にも影響を与えたのではないかとシユカは心配になっていた。

「シユカ様、イヨ様のことまだ責任を感じておられるのですか。どちらかといえば、一番翻弄されているのはシユカ様だと思うのですが……。私、今は巫女をやっておりますが結婚をして幸せに暮らしております。息子もおります。シユカ様より三つ年上になります。今度シユカ様に夫と息子を紹介いたしますね。」

ハネは本当に幸せそうに、花がこぼれるような笑顔を作った。ハネの笑顔にシユカは癒される思いだった。ハネの家族に会うのが楽しみだ。

「この宮に入った巫女は、基本的には巫女をやめない限りこの宮を出ません。イヨ様のおっしゃったとおり、この宮で過ごすものは結婚もせずにと修行に励みます。私はもともと、ずっと修行を行ってそれに専念するのには合っていなかったように思います。だからこそ、大巫女様は私を選ばれたのだと思いますわ。」

大巫女に選ばれて、ハネは嫁いだのだろうか。
素朴な疑問を頭に描いているとハネはシユカを立たせた。そして、緩んだままだったシユカの帯を結びなおし始めた。

「今は、この宮のお手伝いをさせていただいています。初めて宮に来たもののお世話とか、巫女たちの相談役です。ですから、私はこの着物なのです。」

ハネは帯の上から組紐を渡すとしつかりと結んだ。

「ハネ様、もう一つおたずねしてもよいですか。」

「はい。」

シユカはもう一度ハネに向かって座ると、姿勢を正して聞いた。

「ハネ様、私はここで何をすればよろしいのですか。」

ハネは予想された質問だったのか、真面目な顔をして頷いた。

「まずは、シユカ様のその力を使いこなせるように修行を行いましょう。占いや星見など様々なことも学んでいただきます。それに巫女にはそれぞれ仕事がございます。シユカ様にももちろんお仕事をしていただくことになります。」

かななぎをしていたおばの仕様の様子はずっと見ていたので、占いなどに星が大切なことは知っていたが、本格的に学んだことがシユカにはなかった。

「シユカ様に紹介いたしましょう。」

ハネに促されて部屋にやってきたのは、先ほどシユカを案内してくれた若い巫女だった。

「シユカ様、こちらはウミです。日常的なことはウミに聞いてください。ウミはシユカ様と同じ年ですので、よき友となりましょう。」

こちらの部屋は二人の部屋でございます。」

ウミと呼ばれた少女は、黒い髪を真ん中で分けて後ろで結んでいた。広く形のいい額の下には少し釣り上った闊達そうな瞳が輝いていた。きゅっと引き締められた口元からは意志の強さを感じる。

「ウミでございます。よろしく願います、シユカ様。」

ウミは下げた頭を持ち上げるとしつかりとシユカに目を向けて挨拶をした。

シユカもウミの方に向き直り、挨拶をする。

「こちらこそ、わからないことばかりでご迷惑をおかけするかもしれません、よろしく願います。」

二人は目を合わせるとにこっとほほ笑みあった。シユカは、何となく仲良くなれそうな予感がして素直にうれしく思った。

「お二人にひとつお願いがあります。私に丁寧な言葉で話すのはやめてください。私、生まれはどうかわかりませんが14年間ただのシュカとして生きていたんです。ただの村のシュカです。どうか、シュカとお呼びいただけませんか。ここでは新人です。どうか、普通の新人に対するように扱って下さい。」

ハネとウミは少しの間考えていたが、繰り返しお願いすると、そうすると言ってくれた。

「わかりました。おっしゃる通りにいたしましょう。ウミもよいね。」

ウミはハネに頷くとにつこり笑った。

「よろしくシュカ。では、私のこともウミと呼んでね。」

シュカもほほ笑んで返した。

「こちらこそ、よろしくウミ。」

(19) 新しい生活

(19)

その日は、旅の疲れをとるためにその部屋で過ごした。

夕餉はウミが部屋まで持ってきてくれ、二人で食べた。宮での食事は、簡素だったがおばとの暮らしでは大体そんなものだったので不満はなかった。

翌朝、シユカは陽が昇る前に目が覚めた。習慣になった時間だった。布団を片付け、昨日渡された袴に着替えた。襟を整え、袴の帯をしつかりと締める。

シユカは、昨日初めて袴を穿いてからこの袴という着物がとても気に入っていた。これを書くとても気持ちがいやんと前向きになる。美しい赤色も気に入っていた。

「随分早いよね。」

声に振り向くと、ウミが目をごすりながら起き上ったところだった。「ええ、いつもの時間になったら目が覚めてしまったの。」

シユカは着物が整うと、髪を結い始めた。手で後ろになでつけひとつに結おうと思っていた。

「宮の仕事は、太陽が山に差し掛かった頃に始まるの。私と一緒に仕事をするように言われているから、準備が整うまで少し待ってね。」

「そういうと、ウミはてきばきと支度を始めた。」

シユカが髪にひもを巻き、結びあがる頃には袴をはき、あとは髪だけとなっていた。

あつという間に髪も結び上げ、支度が整う。

「お待たせ。では、行きましょうか。」

「すごい、あつという間ね。」

感嘆の声を上げるシュカに、ウミは当然と云った感じでほほ笑んだ。
「慣れれば、シュカもこのくらいで支度できるようになるわ。」
ウミはそう言いながら部屋を出た。シュカは慌てて後を追う。

ウミがやってきたのは、かまどの置いてある土間だった。

土間に降りると勝手口を押し開ける。戸口からは、少し白んできた山がうつすらと見えた。

土間の水甕の横に置かれた手桶に水を汲むと、外に出た。

その様子を見ていたシュカにウミが手招きする。

外に出ると手桶の水に浸した手ぬぐいを絞って渡された。

「これで顔と手を拭いて、清めて頂戴。」

シュカは渡された手ぬぐいで顔と手を丁寧に拭いた。冷たい手ぬぐいが顔に気持ち良くさっぱりとした。

ウミは手桶の水を捨てると、水桶を持ってきた。

「私たち若手の朝の仕事は水くみな。階段を降りた先に湖があるのでしょ。湖のほとりに泉があるの。そこから水を汲んでくるのよ。」

湖とは、昨日付いた場所のことだろうとシュカは考えた。

昨日、湖から宮を見上げたことを考えると村の時よりも少し距離が長いかもしれない。

二人が水桶を二つずつ担ぎ階段を下りていく。昨日上がったものはまた別のものだ。もしかしたら、昨日ハヤテが言っていた別の入口とはここかもしれない。

足元はきちんと整えられていたので歩きにくいということとはなかったが、階段は随分急だった。帰りはこれに水が入った桶を担ぐかと思うと少し不安になった。

「でも、シュカが来てくれて正直うれしいわ。」

ウミは軽い足取りで踊るように階段を降りながらシュカに話しかけた。

「私たちの年代の巫女はいなかったの。だから10歳になってこの

仕事を任されるようになってから、ずっと一人でやってたの。」

この道を一人で何往復を行うのは大変な仕事だろう。

そうしているうちに湖に着いた。船着き場から少し離れているようだった。

やはりこの湖を見ると心が落ち着く。村の懐かしい湖とよく似ていた。

ウミは、そこから少し森に分け入っていった。

「宮の近くを川が流れているんだけど、湯あみなんかはそこから水を汲むの。でもお供えや飲み水はこの泉の水を使うの。二つの甕が満杯になるまで汲むんだけど、今までは三往復はしなきゃいけないのよ。」

二人でやれば二往復で終わる。ウミが喜ぶのもうなずける。

泉は、岩の間から水が湧き出ていた。そこにたまった水が泉へと流れ出ている。

シユカはいつもの癖で、水桶を横に置くと、草むらに膝をついた。

「豊かな泉の神様^{シエイ}、われらにその恵みをお分け下さい。」

祈りの言葉を呟いてから、ここでは作法が違ったのかもしれないと気付いた。ウミに呆れられてしまっただろうか。恐る恐るウミの方を見ると、驚いた顔のウミがいた。

「祈りの言葉を知っているのね。これから教えようと思っていたのに。」

どうやら祈りの言葉は同じだったようだ。思えばこの祈りをシユカに教えたのはおばばだった。

おばばはこの宮で同じように祈りをささげていたのだと、わかっていたはずの現実になぜかうろたえてしまった。

「ええ、私を育ててくれた人は、この宮で修行をしていたから。たぶん……。」

最後の言葉は、ぼそぼそとなって聞こえなかったかもしれないが、ウミは分かってくれたようだ。

「そうか。じゃあ、さっそく水を汲もうか。」

うん。と返事をする、二人は水を汲み始めた。

泉の水は、心地よいほど冷えていて、触れるとシュカの手にするつとなじんだ。

シュカの指先から泉の力が伝わってくる。シュカは泉の温かく、深い感情を感じた。

この泉は、宮を守っているのだとわかる。

『こちらでお世話になることになりました。これから、よろしくお願いします。』シュカは、心の中でつぶやいた。

予想通り、水くみは骨の折れる作業だった。水を運ぶのには慣れているシュカであっても急な階段を上るのは大変だった。

二往復する間にすっかり太陽が顔を見せていた。

これを一人で行っていたウミを、シュカは心から尊敬した。

(20) 朝餉

(20)

宮で暮らす巫女はみな、朝餉の前に自分の仕事をこなしていた。それぞれに振られた仕事は違ったようだが、生活に必要な大部分のことを巫女が自ら行っているようだった。

朝餉は全員が広間に集まっていたのだそうだ。ウミとともに入った部屋は、おばばの家が三つは入りそうなくらい大きな部屋だった。

そこに次々に巫女が集まる。朝餉が並べられた膳を見る限り、この宮の建物の大きさから考えるよりも随分少ない人数で生活をしているのだとシユカは意外に思った。

ウミにならって、下座に座ったシユカの前にシユカよりも若い巫女がかゆを運んできてくれた。

好奇心を隠しきれない顔で、ちらちらとシユカを見ながら皿を置いた少女巫女にシユカはほほ笑んだ。

少女巫女は恥ずかしそうにパタパタと逃げてしまった。

「あんなに幼い子もいるのね。」

シユカは隣に腰を下ろしたウミに声をかけた。

「そうね、ここの巫女の多くは5、6歳で宮に上がっているわ。早く力が見つかればそれだけ早く上がってくるの。逆に、成人してから力に目覚めて宮に上がったものもいたそうよ。」

「そうなんだ。ウミは何歳からこの宮に務めているの？」

「私？私は6歳の時からよ。もう、ここで過ごした年付きの方が長くなっちゃったわ。」

ウミはそう言って明るく笑ったが、そこに微かな寂しさも滲ませていることをシユカは見逃さなかった。

私自身は、どうして宮に預けられたのかしら。シユカは自分の出生を結局知らないままだった。ハネやおばばの話だと、赤ん坊の時に

宮を出されたという。であれば、どうしてそんな時期からシユカは宮にいたのだろうか。

ずっと疑問に思っていたことだったが、さらに謎を深めた。

シユカが物思いにふけっている間に、朝餉の準備が整ったようだった。

巫女がそれぞれの座に着く。上座の2席が空いていた。みんなが着いたのを見計らったように、戸が開かれ、そこから入ってきたのは大巫女と大巫女の手を引いて先導するハネだった。

ハネは大巫女を上座に座らせると、隣に着いた。

「みなさん、おはよう。今日から仲間が一人増えました。紹介しましょう。シユカこちらへ。」

ハネの声にみんなの視線が一気に自分に集まるのを感じる。

「はい……。」

シユカは緊張しながら、ハネと大巫女のもとへ行く。

ハネと目が合うと、目で座るように促される。シユカは、ハネの隣に座ると、手を付いて頭を下げた。

「シユカでございます。精進いたしますので、ご指導をお願いいたします。」

シユカが頭をあげると、自分を見る多くの目と出会う。なにを考えているのか読めないみんなの真剣な表情にシユカは少しうろたえた。その視線に負けないようにぐっと力を込める。

一番遠い席に座るウミの心配そうでいてシユカを安心させようとする優しい笑顔が見え、シユカも自然とほほ笑んだ。

すると、じっと見つめていたみんな表情が少し緩んで見えた。

「シユカは慣れないことも多い、みんなもいろいろと教えてやってくれ。しばらくはウミとともに仕事も行う。」

ハネの言葉に、シユカは自分の席へ戻った。

シユカが席に戻るとやっと朝餉になった。食事中はみんな、しんつとして黙々と食べている。

たった二人の食事だったが、いつもシユカがにぎやかにしゃべりおはばがにこやかに相槌を打ってくれていた家での食事や集まるとうるさいくらいにみんながしゃべっていた果て織り場での食事とは全く違っていた。昨日の夜はウミといろいろ話しながら食えることができたが、今日はウミも黙って黙々と食べている。

女ばかりが集まっているのに静かな食事に、シユカはさみしさを感じた。

朝餉の後は、いよいよ修業だった。

「修行といってもそれぞれの力が違うから、自分の力を制御できるようにするまではそれを中心に学んでいくの。」

ウミと向かい合って座ったシユカは、ウミの話に真剣に耳を傾けていた。

「それができるようになったら、力を使うことを練習するの。」

「ウミはどんな力を持っているの？」

シユカは、ウミにずっと聞いてみたかったことを聞いてみた。

「私は、増幅の力よ。」

「増幅？」

「そう、簡単にいえば人やモノの持っている力を引き出すの。けがをした人の力を引き出して治癒を行ったり、作物の力を引き出して大きく育てたり。私自身が何かをするわけではないの、その人の持っている力を最大限に活かすのよ。」

「すごいわ！ウミ。とても素晴らしいわ。人のために活かされているのね。」

「そうね、ここで修行をしたおかげよ。でもね、ここに来るまでは良いものも悪いものも力を伸ばしてしまうものだから大変だったのよ。子どもだったし、うまく使えなくて。」

「そうなんだ。でも、すごいわ。そんな風に変われるなんて。私の力も何かの役に立つのかしら。」

「シユカの力は、まだどんなものがあるのか全部が分からないって聞いているけど、シユカはどんなことができるか自分ではどう思っている？」

シユカは、頭の中で今までのことを思い浮かべながら話した。

「・・・ん。今までで言うのと、近くにいたり、触れたりした人の過去を見ることがあったわ。あと、触れると自然や動物の思いが何となくわかるような気がする。あとは・・・背中of痣が薦みたいに動くっていうのは力に入るのかしら・・・。痣は、ハネ様に習って抑えることは出来るようになったのだけれど、薦が何をするのかはわからないままなの。」

「シユカの力の中心は“視る”よね。でも、やはり力は不安定のようなだわ。今、薦を出すことはできる？」

シユカは「たぶん」と頷いた。村にいたときにそれはハネの指導で何度か試した。多分できると思う。

シユカは目を閉じると意識を背中に集中した。一点に意識を集中させると温かいものが背中に集まる感覚がする。『おいで・・・でておいで・・・』心の中でつぶやく。

シユカは頭の中でその温かいもの集めて、それを全身に開放する様子を想像した。

背中of中心で温かいものが膨らんでいくのが分かる。シユカは小さく息を吸って、それを一気に吐き出した。

吐き出された息とともに指先まで一気に熱が走る。背中から、背筋を上って首に絡む。また、肩まで上がり、ひじを渡り爪先まで一気に走る。力が解放され、一瞬で『ぶわっ』と全身に広がっていくのが分かった。

シユカはゆっくりと目をあけた。鼓動が激しくなっている。薦の勢いに押され、息が上がる。

腕の上をうごめくように真っ赤な薦が這っている。薦のおかげで、真っ白な肌が真っ赤に染まったようになっていく。薦はゆらゆらと揺れるように動き、体全体にからんでいた。

(21) 見極め

(21)

シュカがウミに視線を合わせると、ウミは感嘆の声を上げた。

「すごいわ、離れて座ってても、シュカの力がとてつもなく大きいのが分かるわ。こちらが圧倒される。」

ウミは、シュカににじり寄る。

「触ってもいいかしら。」

ウミは、じつと鳶を見つめ右手をのばした。もう少しで触れるというところで止めると、目線だけ挙げシュカに聞いた。

「ええ、大丈夫よ。」

ウミは腕の痣にそつと触れた。

触れた瞬間、ウミの指の周りにあつた鳶がひゅつとそこをよけた。

そして、恐る恐るといった感じでウミの指先に触れるように近づいて行った。

「なんだか、生きてみたいね。」

「そうなの。最初は何にも感じなかったし、少し怖かったんだけど。上手く動かせるようになってくると、何となく意志を感じるの。私の感情に連動しているようにも感じるけど、何となく肌の上に小さな動物を飼っている気分なのよ。」

「なんだか、かわいいわね。」

実際鳶なのだから、かわいさもあつたものではない。しかし、その動きは本当に小動物のようで疑問はたくさんあるけれど何となく可愛くなってきているのも事実だった。

ウミは腕を取ったまま目を閉じると、息を整える。

シュカはウミがつかんだ腕からウミの探る気配を感じていた。

鳶も、それが落ち着かないのかうろろしている。

ウミは目をあけると、にっこりとほほ笑んだ。

「ありがとう、もうしまってもいいわ。」

ウミは、手を引き元いた場所にまた座った。

シユカは目を閉じると、深呼吸を繰り返した。『さあ、元いた場所にお帰り。』

鳶は出てきたときは対照的に、ゆっくりと背中に戻っていった。しばらく背中を中心でうごめいている気配をさせていたが、徐々に落ち着いてきた。

シユカは目をあけた。さっきまでがうそのように、また真っ白な肌に戻っている。

シユカは脱力するように、息を吐き出すと足を崩してへたり込んだ。『ありがとう、シユカ。疲れたわね。でも、おかげでわかったこともあるわ。』

短時間の内に何かをつかんだウミをシユカは尊敬のまなざしで見つめた。

「わかったこと？」

ウミは頷く。

「私の力は増幅と云ったわよね。力を増幅するためには、その人の持っているものを見極めなければならないの。私はこの宮でその力を伸ばすことに重点を置いて修行してきた。だから、新しいものが来たとき私が力を視ることが多いの。」

ウミは笑顔を引っ込め、真剣な顔をした。シユカもあわてて背筋を正す。

「まず、シユカの鳶はシユカの言う通り意志を持ってる。確かにシユカの感情に左右されるのでしょうけど、基本的にはシユカを守っているものだと思うわ。だから、ハネ様に襲いかかろうとしたり、大巫女様の封じも少しずつ解けてのだと思うの。そして、それはシユカの持つ大きな力と関係があるのだと思うわ。」

「守る・・・では、この鳶は私に害をなすものではないということ？呪われたり。」

「違うと思うわ。もっとも、どんな役目を持っているのかは残念ながらわからなかった。でもね、シユカがもっとその鳶と意識を通わ

せることが大事だと思うわ。そうすれば、おのずとシュカ自身が理解するのではないかしら。シュカの力は底が知れない感じがしたわ。私では測れなかった。でも、シュカの力が“感応”の力を持っているということは分かった。」

「感応？」

「そう。人やモノの思いに感応するの。だから過去や思いを見てしまう。大地や自然の記憶や感情を受け入れるの。」

ウミは、じっとシュカの目を見て続けた。

「視る力の方はその専門の巫女について伸ばしていけばいいと思うわ。でもね、心配なのは感応というのは引きずられやすいということ。その力を使いこなすには、感じた強い思いに負けにくい強い意志を持つことが大切だわ。それができなければ、シュカはその思いに飲み込まれてしまうでしょう。」

シュカの脳裏に先日の少年の思いが浮かんできた。確かにあのときシュカは少年の思いに飲み込まれそうになっていた。ハネが、落ちて着かせてくれなかったらどうなっていたか。

改めてシュカはぞっとした。

「そうかつ、もしかしたらそれを抑えるための薫なのかもしれないわね。」

なるほど。シュカはもうそこにはいない薫をなでるように腕をさすった。

今まで得体が知れなくて、少し恐れていたものがすごく身近になったように感じた。

「今日は、これくらいにしましょう。」

ウミの言葉にシュカも頷いた。

それからシュカは毎日を仕事と修行に忙しい日々を過ごした。機織りが得意だと云うと、機織りの仕事もさせてもらえることになった。

初日は怖いなあと恐れた先輩方も、想像したよりもずっと優しく接してくれた。恐れた自分を恥じるくらいに。

宮での生活は思っていたよりも穏やかで充実していた。

そんなある日、ハネから呼び出された。

宮での生活で、ハネが宮で大きな存在であることが分かっていた。

巫女ではないが、大巫女に代わって宮での一切を仕切っていた。賢く、懐も広いハネは宮のみんなから慕われていた。

宮を支える働き手のみんなにはハネは『奥さま』と呼ばれていた。

知らなかったとはいえ、村や道中での自分の対応を思い出すと反省然りだ。

宮に来てから自分の中の子どももつばさを感じて反省することが多いなあと感じるシュカだった。

(22) ハネの部屋

(22)

「シユカでございます。」

夕餉のあと、シユカは宮の東の部屋にやってきていた。教えられた部屋の前までくると扉の向こうに声をかけた。中から、入るように声がする。

「失礼します。」

シユカは扉に手をかけて音をたてないように開けた。部屋の中には、ハネとシユカが予期せぬ人が座っていた。

「ハヤテ様!!」

思わず声を上げシユカは部屋の中へと駆け寄った。

結局、宮へやってきた日からハヤテとは再び会うことができなかった。宮の中で働いている男性は大変少なく、シユカのような新人が行う仕事場ではなかなか会うこともなかった。

たまに出会う男性の働き手の中にハヤテがいなかったため、宮へ来るための旅のお礼も云えないままだった。

シユカはハヤテの前に座ると頭を下げた。

「お久しぶりでございます。ハヤテ様。」

ハヤテは柔らかい笑顔でシユカのあいさつを受け入れてくれる。

「シユカ様。お久しぶりです。お元気そうでした。この前はきちんとしたご挨拶もせず失礼いたしました。」

「そんな、きちんとご挨拶しなければならなかったのはこちらでございませう。お礼も申さずに失礼いたしました。でも、ハヤテ様も元気そうでした。お会いできなかったので、心配していただきます。」

「シユカ様、恐れ多いお言葉です。」

頭を下げるハヤテに慌ててシユカは手を振る。

「そんな。やめてください。私は一介の巫女でございます。どうぞシユカとお呼び下さい。そもそも、ハネ様もハヤテ様もどうして私に様をつけられるのでしょうか。」

「そんなっ・・・当たり前です。私は・・・」

「はいはい、そこまで。」

二人の話が終わりそうにないと読んだのか、ハネが二人の会話を遮った。

そうだ、ハネに呼びだされたのだったとシユカは思い出した。

シユカはハヤテを見て、思わず体が動いてしまったことを反省した。「シユカ。今日は前に約束していた通り、私の家族を紹介しようと思いい、あなたを呼んだんですよ。」

ハネは下働きのものから『奥さま』と呼ばれている。宮でのハネの様子を考えると旦那様は身分の高い方なのだろうとシユカは考えていた。

「そうなのですか、私も楽しみにしていたのです。」

シユカの言葉にハネは、片眉をあげてニヤツと笑った。

「あら、楽しみにしてくれていたのはうれしいわ。」

でも、部屋にはハネとシユカ、ハヤテしかない。シユカの顔に疑問が浮かんでいたのが伝わったのだろう。ハネが笑いを含んだ顔をしながら手で示した。

「こちらが私の旦那さまよ。」

えっ？その手を伝って示された先を見る。・・・ハヤ・・・テさ・・・ま？

ハヤテはシユカのぼかんとした表情に苦笑いしながら云った。

「隠していたわけではないんだが、云いそびれてしまって。私とハネは夫婦なのだよ。」

シユカは驚きに目を見開いた。だって、旅の時もそんなそぶりひとつも見せなかった。

確かに仲は良かったように思ったが、結構年も離れていると思うし。シユカは、ハヤテと違い故意に驚かそうと隠していたのだろう人物

を見た。

「そんなに意外かしら。これでももう連れ添って18年になるのよ。私、ハヤテの奥方に選ばれて宮を出たの。」

「意外とか、そういうんではないんです。でも、考えたことがなかったので驚いてしまつて。ごめんなさい。」

「そんな謝らないでください。ハネが驚かそうとしたのが悪いのです。」

「そうですよ、謝るのはこちらです。驚かしてごめんなさいね。」
ハネは、いたずらが見つかつた子どものように無邪気に笑つていて、シユカも思わず笑つてしまつた。

「ハヤテ様はこの宮で働いておられるのですか？こちらに来てから一度もお会いできなかったのでこちらにはいらつしやらないのかと思つていたんです。」

今度はハネとハヤテが驚く番だつた。一瞬二人は顔を合わすとハネはたまらず吹き出した。

「ふふつ。ハヤテは一応この宮の主なあるじのですよ。表だつてみんなと働くことはありませんが、宮の外での仕事を中心にこの宮を支えてくれているのです。」

「そうだね。私はなかなか宮にいない。大巫女様のお役目で宮をあけていることも多いからね。まあ、主といつても、宮を出られない巫女たちの代わりに外での役目をするのが仕事のようなものさ。その代わり、内でのことはハネが仕切ってくれているからね。」

疑問に思つていたことが分かつてシユカは納得するとともに、二人に失礼なことを聞いてしまったことに真つ赤になつた。

また、失礼なことを云つてしまつた。どうしよう。そういえばハヤテの父力カも宮で大巫女の側役を仰せつかつていた。力カはあの後主を継いだのだろう。そして、力カの跡を継いだのがハヤテだつたということなのだ。

「ごめんなさい。また、失礼なことを……。」

「まあまあ、そう小さくなられてはこちらが困つてしまふ。いつも

の笑顔をお見せくださいな。」

ハヤテは相変わらずシユカにとても優しくかった。失礼だと怒ってもいいのに、シユカは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

なかなか顔をあげてくれないシユカに、ハヤテは思い出したように声を上げた。

「そうそう、忘れていた。もう一人紹介しようと思っていたんだ。」

ハヤテはハネに目配せをすると、ハネはシユカが入った戸とは違う方にすり寄ってそこにあった戸をあけた。

戸から入ってきたのは、スラッと背の高い若者だった。すっと通った鼻筋に鋭い瞳、でも頬はまだややふつくらとしていて少年らしさを残している。村の女の子が見たならば黄色い声を上げそうな美男子だった。

若者はシユカを全く見ずにハヤテの隣まで進むと、さわやかな所作で腰を落とした。

座ったのを確認してハヤテが紹介した。

「紹介します。私の息子のです。アサギです。」

アサギと言われた少年の顔をよく見ると、目元がハヤテによく似ていた。気の強そうなところはハネに似ているか。

しかし、ハヤテが続けたことばに反応したのはシユカだけではなかった。

「今日からアサギがシユカの側役になります。」

(23) 怒りの矛先

(23)

「はっ？」

シユカは云われた意味が分からず、口をあけたまま固まった。シユカと同じように固まっていた人物がもう一人いた。

しかし、その人物はシユカよりも早く覚醒し、顔をゆがめると次の瞬間には非難の声を上げていた。

「父上、どういうことです。どうして私がこんな小娘の側役をしなければならぬのです！！主の後継は大巫女の側役をするのがしきたりのはずです。」

かなりの勢いで詰め寄られたハヤテだったが、その表情は落ち着いたものだった。

ハヤテはアサギを一瞥すると、低い声でアサギに告げた。

「言葉を慎め、誰のことを小娘とのたまっている。このことは大巫女様もご了承のこと。お前が意見できることではない。」

ハヤテの厳しい声と表情はシユカが初めて見るものだった。先ほどの発言にも驚いたが、いつも穏やかで優しいハヤテの見たこともない一面の方にシユカはひどく驚いた。

その威厳は、宮の主として生きる男そのものだった。

「私どものしつけが悪かったようで、失礼な口をききました。申しわけない。」

すでにいつもシユカに見せる表情に戻ったハヤテに謝られ、シユカはただ首を振った。

シユカは諷められたアサギをうかがい見た。

すると、シユカの視線に気づいたのかアサギもシユカの方を見る。

その視線は、人など簡単に射抜くのではないのだろうかと思うくらい鋭かった。

シユカはこんなに憎しみのこもった目で見られるのは初めてだった。

その強い思いに、背中がぞわぞわとする。

シユカは腕に蔦が一本伸びてくるのを感じた。シユカは腕をぎゅつと握ると心の中で「大丈夫」と繰り返し返した。蔦は握りこんだシユカの手のひらをなでるように動いて引っ込んだ。慰めてくれている。シユカは少し心が温かくなるようだった。

いつの間にか入っていた肩の力を抜くと、アサギを見据えた。ここで負けたくない。

突然のことに驚いたのはわかる。しかし、シユカだって初めて知ったのだ。大人の思惑も分からない。自分自身の足元もまだ不安定だ。憎しみを向けられるのは心外だった。

アサギはじつと見つめたシユカの瞳を忌々しげに見つめ、不意にそれをそらすとおもむろに立ち上がり何も言わずに部屋を出て行ってしまった。

「シユカ、うちの愚息がごめんなさい。厳しく育てたつもりだったのだけれど、跡取りにものすごくこだわっているようで。私たちが忙しくて手をかけられなかった分、周りにちやほやされてしまって母親のせいだわ。ホントにごめんなさい。」

ハネの謝罪にシユカは首を振った。

「アサギ様のおっしゃる通り、私はただの小娘でございます。アサギ様が腹を立てられるのももっともだと思います。大巫女様が何をお考えなのか、私に窺い知ることなどできません。なぜわたくしに側役が必要なのでしょう。」

シユカの言葉に異論を唱えたのはハヤテだった。

「シユカ様。シユカ様はただの巫女ではありません。まして、小娘など……。」

ハヤテの声は穏やかそのものだった。先ほどの力強さが幻のようだ。困って眉を寄せる様子など、シユカの知っているハヤテだった。質問に答えてくれたのはハネだった。

「シユカ様、シユカ様を前に朱月の巫女だと申し上げたのを覚えて

おいですか。」

ハネの言葉にシュカは記憶をたどると頷いた。

「朱月の巫女は特別な巫女です。双子月を動かす巫女とも言われています。シュカ様はその朱月のさだめを持った巫女なのです。詳しくは私にも語ることができません。しかし、時が来れば必ず大巫女様からお話があります。不安かもしれませんが、お許してください。」
シュカに対する二人の口調がまた丁寧な形に変わっている。ここで二人に問いを投げかけてもきつとこれ以上の答えは聞けないのだろう。シュカは無意識でため息をついていた。

シュカはハヤテとハネの部屋を出ると、長い廊下を歩いていた。

赤い柱の向こうには、冬を迎え冷たくなった夜の風が吹いている。

廊下の中盤に差し掛かった時、シュカは背後で床がなったのに気がついた。

「おいっ。」

シュカは振り向かないまま足を留めた。

「おいっ、聞こえてんだろ。」

シュカは、振り向くと意識して声を荒げないように云った。

「聞こえています。大きな声を出さないでください。」

アサギは、さっきと同じ憎しみのこもった目でシュカを見つめていた。

「お前、父上や母上、大巫女様に目をかけられてるっからって調子に乗るなよ。おれは絶対にお前なんかにはえるつもりはないからな。」

シュカは気持ちで負けないように強い目でアサギを見た。そして、わざと笑って云ってやった。

「アサギ様、私は『おいっ』でも『お前』でもありません。なんと言われても、私にはどうすることもできません。何か仰りたいことがあるのなら大巫女様に仰ってください。」

アサギにはとんでもなくかわいげのない女に映ったであろう。しかし、シユカとて頭ごなしに否定されるいわれはない。

さっきの部屋で全く腹が立たなかったわけではないのだ。

「くっ……。云われずとも分かっている。覚えて居れ、このままでは措かぬからな。」

アサギは憎々しげに廊下を歩いて行った。

きつと、いや絶対に大巫女様のところにも行くのだろうなとシユカは心の中で思った。

まあ、この生活でそう一緒に過ごすこともないだろう。名前だけのことだろうとシユカはあまり心配していなかった。

シユカはアサギの去った方をじっと見つめながら、柱の外から吹いてくる風を頬で感じていた。

ここは山の上に立っている割には冬の気候が穏やかなようで、シユカはまだ雪を見ていなかった。

シユカが育った村では秋祭りが終わると間もなく雪が舞い始める。

いつもの年だったら、雪に閉ざされた村の中で女たちが集まって機織りに精を出す時期だった。

今日は夜に明かりがこぼれて森の様子がよく見えた。

紅い柱からハネの話に出ていた双子月を覗き込むように見つめた。

今日の双子月は寄り添うようにならんで浮かんでいる。だからいつも以上に光って見えた。

自分を見極めるためにここに来たはずなのに、なかなかそれが進まないことにシユカは先の見えない暗闇を歩いているような気分だった。

せめてこの夜のように、足元を照らしてくれる明かりがほしいとシユカは思っのだった。

(24) 双子月の下

(24)

やっと慣れたかなあと思っていたのに、アサギの一言で急に村に帰りたと思う自分の心にシユカはため息をついた。

村にいたときでも、一人になりたいと思っていたシユカが、こうして村を欲することに自分自身で呆れてしまう。でも、いつもおばばはどうしているか考えないときはなかった。おばばにあって、優しい笑顔を見たい。その欲求に押しつぶされそうになる。

シユカの足は、自分の部屋ではなく宮の外に自然と向かって行っていた。

足元は双子月が明るく照らしてくれる。

水汲みで通う階段は、多少暗くても戸惑わないくらいは慣れていた。湖の近くまで降りるとさすがに水面を吹く風が冷たかった。自分の吐いた息が白くなるのが見える。

最初に訪れた時からこの湖は村を思い出させた。

シユカは湖の縁に座りこむと手を組んで頭を下げた。

「豊かな湖の神様、しばしの間こちらで休ませていただくことをお許してください。」

シユカが両手を湖に浸けると鳶が伸びる。まるで水を吸い込むかのように生き生きと動いている。

湖のそれを温かく受け入れる気配を感じ、シユカはやっと心を落ち着けることができた。

この宮に来てからもうすぐひと月。やっと仕事にも慣れ、他の巫女とも予想以上に仲良くできている。もちろんそれはいつもそばで助けてくれるウミの存在が大きい。

しかし、修行に励めばそれだけ成果を感じることができるし、この

宮の者たちは働けば働いただけきちんと認めてくれた。

ここにいる巫女たちはそれぞれの力を過信することなく冷静に受け止め何かに役立てるために頑張っている。一人ひとりが自分のなすべきことのために努力する、そういう教えが行き届いていた。

シュカはこの環境の素晴らしさを感じるたびに、自分の幼さやふがいなさを実感していた。

だから、アサギの言葉には腹が立ったが、シュカ自身もつともだと思う部分もあったし、側役がつくことは中途半端な自分には不相応だとも思った。

シュカは自分の幼さや甘えをアサギのあのまなざしに見透かされているような気がしたのだ。

村でそうしていたようにシュカは、ほとりに腰を下ろすとぼんやりと空を見上げた。

今日の双子月は互いが近いので光が強い。すでに月はシュカの真上まで上がっていた。

おかげで星は見えないが、それでも月から遠い山裾のあたりにはかすかに星が瞬いているのが見えた。

村ではいつも、つらいことや悲しいことがあるとこうして湖までやってきた。

そして、湖には自分をもつとも慰め甘やかしてくれる存在がいたのだ。

しかし、ここは村ではない。

シュカの胸にさみしさがあふれる。

シュカはただ、湖の静かな調べと明るい夜空に心を傾げるしかなかった。

どれほどそうしていただろうか。双子月が雲に隠れてしまった。

ずっと空を見上げていたシュカの体はすっかり冷えてしまったので、シュカは腰を上げようとした。

しかし、腰を上げようとしたとき、かすかに湖が靄に包まれていることに気付いた。

背中がざわざわとして、蔦が落ち着かなくなる様子が伝わってくる。シユカは伸びてきた蔦を優しくなでた。

あつという間に水面が隠れるくらい靄が湖を覆っている。

シユカが目を凝らすと、湖の向こうから何かが近づいてくるのが見える。

まさか

シユカは段々と姿がはつきりとしてくるその者に、知らず涙がこぼれてくるのを止められなかった。

それは、シユカの間近まで来ると動きを止めた。白いつややかな手がシユカの頬を滑る。

「また、泣いているの？」

シユカは声を発せず首を振る。涙は止まりそうもない。

「・・・つく、うつ・・・ト・・・トウヤ。」

シユカは絞り出すように名を呼ぶと、その者にしがみついた。

トウヤはゆつくりと背をさする。その顔には、慈愛に満ちた笑顔が浮かぶ。

「・・・うつ・・・もう、会えないかと思ってた。」

トウヤは腰に回した手を強めると、背をさすっていた手を頭に回し、優しくなでた。

「ふふふ、大丈夫って言ったじゃない。」

トウヤだ・・・。本当にトウヤだ。

村を出ることが決まって、いくら湖に行っても出てきてくれなかった。さよならも言えずにトウヤと別れなければならなかったことがシユカの心に傷を残していた。

「でも、どうして？」

ここは村ではない。どうしてトウヤがいるのか。

「ここの湖は、村の湖につながっている。つながっていれば、どこへでも行けるんだ。」

確かにつながっていた。それは湖をとおって船に乗ってやってきたシュカが一番よくわかっていたことだ。

「とにかく、あなたに会えて本当に良かった。本当に。」

シュカはトウヤから離れると涙をぬぐって微笑んだ。

トウヤは村で会っていたときと何も変わらなかった。まったくそのままだ。

シュカとトウヤは湖のふちに腰を落とすとしやべり始めた。

この宮へどうしてやってきたのか。どんな暮らしをしているのか。

友だちや他の巫女について。

話は尽きなかった。それは月が西に傾くまで続いた。

シュカはトウヤとの久しぶりの逢瀬に夢中になっていて気付かなかった。

その様子を森の中から見ている者がいたことに。

(25) 可愛げのないやつ

(25)

草むらには茶色い頭が見えている。

周りは警戒しているのか、くるくるとよく動く頭が下に降りるのを待つ。

息を潜め、低い姿勢から素早く矢をつがえると狙いを定め、一気に引くと手放した。

シュツ、カツン

明らかに岩に当たる音に、舌打ちをする。

「ちつ、またはずれた。」

一瞬びくつとして草むらから飛び立つ鳥をにらみつける眉間にはきつい皺が寄っている。

くそつと投げた弓矢を、にやにやと笑いながら拾ったのはマニだった。

「なんだよ、最近荒れてるなあ。男前が台無しだぞ、ほら見る怖がつて獣すら逃げてんじゃねえか。」

着物をだらしなく着た、ひよろつと背の高いマニはたいていにやにやと笑っている。その目は糸のように細く。にやにやした笑いが全く嫌味に見えないのは持つて生まれた特性だろう。

「うるさいよ。」

力なくつぶやきマニの持った弓矢をひつたくと、アサギは踵を返し歩きだした。

マニは相変わらずにやにや笑いで、アサギの後ろを着いて歩く。マニはいつになく落ち込んだ様子の幼馴染をなんとかからかってやろうかとさらに笑いを深めた。

「で、どうしたのかな。落ち込んでる理由は女かな？」

アサギはマニのにやけた顔を一瞥すると、顔をそむけ弓矢の手入れ

を始めた。

女・・・確かに女だ。あの女が来てからだ。いや、来ることになつてからだ。

最近何をやってもうまくいかない、思い通りにならない。

得意の狩りだつてこのざまだ。

「ほらほら、またここに皺が寄つてるよ。」

マニがアサギの眉間に人差し指を当てる。

「あれっ？ ホントに女なの？ 今まで女なんかに見向きもしなかった癖にこういう風の吹きまわし。」

「そんなんじゃないよ。」

「あらら、アサギが女に悩まされてるなんて知れたら、村の娘たちないちゃうなあ。」

アサギはため息をついた。

「お前の頭ん中にはそんなことしかないのかよ。女は女でも色恋じやねえよ。第一巫女だ。」

「巫女様との禁断の恋ですか？」

こいつには言葉が通じないのだろうか。アサギは呆れた目でマニを見た。

「だから違つて。」

「そんなこと言つてないで、話してごらんよ。僕が相談に乗ってあげるよ。」

もし本当に色恋で悩むことがあつたとしても絶対に相談しない。アサギは心の中でそう誓つた。

「宮に新しい巫女が来たんだ。まだ小娘だよ。14になったばかりだつて言つたかな。」

「14才だつたら、別に十分じゃないの？ かわいい、その子？」

アサギはシュカと云つた娘の顔を思い浮かべた。

大きな目は力強かつた。こちらがどんなに睨んでもしれつとしていて可愛げがなかった。色は、大巫女と張るくらい確かに白かつたし、髪は黒く艶やかだつたが・・・

「大したことないよ。」

美人の部類には入るのかもしれないが、まだまだ子どもだ。それに可愛げがない。

「ふーん。そうなんだ。その子どもがどうしたの。」

「そいつ。父上と母上が直々に迎えたんだ。」

マニはその言葉に目を見張った。マニもこの村の男だ。宮に迎えられるものが数少ないことを知っている。巫女は特別なのだ。ある程度の力がないと宮には入れないらしい。

働き手のものは力なぞなくても入れるのに、巫女を願ってきたものが宮に迎え入れられるのはまれだ。まして、長と奥さまが直々に迎えるなど、どれだけの力をもっているのか・・・。

「父上が一介の巫女を『様』で呼ぶのを初めて聞いた。それだけのものとは思えん。」

三カ月ほど前、父上と母上が突然、宮を空けた。

いつも通りお勤めに上がったら、すでに父上も母上も宮を出立した後だった。前日に突然しばらく宮を空けることを言われた。

宮を頼むと云いながら、父上は「仕事は補佐を務めるタマセに任せである」と云った。父上が自分をまだ子どもとして見ていることを知ってはいたが、こうも頼りにされていないことを見せつけられると、歯がゆい思いがした。

確かに村ではこうして仲間とともにいることもあるが、お勤め自体は至極真面目に取り組んできたし、長の息子として恥じないふるまいをしてきたつもりだ。

代々長を継ぐ者は大巫女の側役として仕える。そこで仕事や宮の教えを学ぶのだ。父上も自分くらいの年には大巫女の側役を命ぜられていたという。

どうすれば認めていただけなのか。

そして、宮を空けた父上と母上が直々に連れ戻ったのが、あの小娘だった。

あの女にどれほどの力があるというのか。ウミや他の若い巫女との違いなど感じなかった。

父上や母上には殊勝にふるまっていたが、一体腹の中では何を考えているものか。

「でも、何がそんなに気に入らないのさ。」

マニのことは、アサギは憎々しげな声を発した。

「よりによって、父上はその小娘の側役におれを据えようとしているんだ。」

なぜ、側役をつけようとするのか自分には理解ができなかった。

父は一体何を考えておられるのか。母上も母上だ。なぜとめないのだ。

「なんで、大巫女様じゃなくてその子なんだろうね。」

そうだ。大巫女様だ。

自分は大巫女様に仕えるはずなのだ。決してあの小娘に仕えるつもりはない。

「どうするの?」

「どうすることもできん。父上が決められたことは覆らん。形だけは従うさ、言われたとおりに。」

そうだ。大巫女様のために形だけだ。自分が化けの皮を剥いでやる。アサギは大巫女の部屋に押し掛けたときのことを思い出していた。

(26) アサギの思い

(26)

あの日、小娘と言葉を交わした後だった。

アサギは小娘に言われるまでもなく勢いに任せて大巫女の部屋を訪ねた。

いつもの冷静なアサギであつたら絶対に行わない夜の訪問だった。

すでに夜は更け、頭上には双子月が出ていた。

仲良く寄り添うさまがアサギの気持ちを逆なでする。

アサギは音を気にすることもなく、どたとたと板張りの廊下を進む。巫女ではない自分は表からは部屋に入ることはできない。働き手用の裏口に向かつて無心で進んでいた。ここは、もしもの際の逃げ口でもある。

奥づまった小さな部屋が見えてきて、アサギは歩調をゆるめた。

扉に手をかけようとして、深呼吸をする。

アサギは大巫女の部屋の前に来て、実際に裏口を目の前にとさずがに勢いに任せてきてしまったことを少し反省していた。

幼いころから慣れ親しんだ方だとは言え、こんな風に突然訪ねて行ったことはなかった。

さっきまで熱く煮えたぎっていた思いが少しずつ冷えていく。

父上や母上が大巫女様の考えを聞かずにこのことを決めたとは思えない。父上や母上は大巫女を絶対的に信じている。では、これは大巫女様の意思なのか。

自分は、ここで大巫女様に対して何と問うつもりだったのか。自分の熱がさめるとアサギは自分の行動の軽率さにやっと考えが追い付いてきた。

扉にかけようとしていた手を、力なくおろそうとしたその時だった。
「アサギ、入りなさい。」

アサギはその声に一瞬びくつとなった。

自分の大きな足音に起こしてしまったのだろうか……。いや、きつと大巫女様にはすべてが見えているのだろう。

アサギは覚悟を決めて扉に手をかけると音をたてないようにゆっくりと引いた。

向かい合わせに座った大巫女は普段と変わらぬ、穏やかな表情でアサギをじつと見ていた。

幸い夜着には着替えておられず、寝ていたところを起こしてしまったのではないことにアサギはそつと安心の息を吐いた。

「夜分に突然の訪問、大変申し訳ありません。」

アサギはせめてもと頭を下げた。

「気にすることはない。きっと来るだろうと待っておった。」

やはり大巫女には自分の行いなどお見通しらしい。たまたま起きておられたのではなく、自分が来ることを見越して起きておられたのだ。

バツが悪く頭を上げられないアサギに大巫女はあくまで優しく続けた。

「頭をあげなさい。目を見せておくれ。」

アサギは頭を上げると大巫女に視線を合わせた。その眼はほのかに蒼がかつていて、見つめると吸い取られていく感覚がした。

大巫女の目はずっと見えないという。しかし、多くのことをまた、視ているともいわれる。

お巫女の前では何も隠せない。アサギはそれが恥ずかしくもあつたが、不思議と強がりもせず素のままの自分でいられることに深い安堵感を感じることも確かだった。

だからこそ、大巫女のそばで使える日を心待ちにしていたし、大巫

女の役に立ちたいと心から思っていたのだ。

「これは、また。ひどく疑ってかかったものだね。」

“何を”とは言わずとも、何を示しているのかは明らかだった。

「大巫女様。わたくしにはかの娘がそれほどのものとは思えません。わたくしが側役を務めなければならぬそのわけを知りたいのでございます。」

大巫女は意味ありげに口角をあげた。

「何がそんなに気に入らない。」

「わたくしはずっと大巫女様にお仕えしたく、お努めに励んでまいりました。それが覆されたというのですから納得のできる理由が知りたいのです。わたくしには長の跡目の資格がないということでしょうか。」

口元は笑っているのに、油断できない。すべてが知られているのに自分は何も知ることができない。大巫女はそんな存在だった。

「・・・跡目になることがそんなに大切な。では問うがアサギはどうして長になりたいのだ。」

アサギは押し黙った。

アサギにとってハヤテの跡を継いで長となることは『なりたい』か『なりたくない』かという問題ではなかった。長には『なる』ものだった。それ以外の選択肢を考えたことはない。

だからこそ、自分が跡を継ぐために大巫女様の側役を務めることが大切なのだった。そこから放り出されたら、自分の足元がなくなってしまうように不安なのだ。

「アサギ。人の生き方には確かにさだめはあろう。しかしな、歩む道ががっしりと決まっておるほどつまらぬものはない。さだめとはいわば道に落ちているものだ。それが大きな岩の場合もあるう、金かもしれぬ、人かもしれぬ。崩さねばその先へ渡れぬものもあれば、みぬふりをして通り過ぎるものもあるだろう。どう道を歩むのかはそなた次第じゃ。では、長というものは何なのであろう。それはさ

だめではない。選んだ道の先にあるものだ。そなたは道を歩いておるかのう。」

道を歩いているか・・・大巫女様は自分がまだまだということ言いたいのだろうか。

「そなたはまだ自分の目を持たぬ。シュカが何者であるのか、どうしてそなたを側役に据えたいのか、わしらが何と言ったところでそなたが納得することはないだろう。良い機会だ。そなた自身で見極めよ。シュカから見えてくるものが必ずあるはずだ。自分の目は自分で育てるのだ。自分の正しき道を自分の手でつかみなさい。」

長になりたければ、自分の手でつかめということか。
それとも、小娘の側役をしながらしっかり小娘を見極めろということか。

どちらにしても試されている。アサギはそう思っただった。

（27）彼の人となり

（27）

シュカとアサギの関係は、表面上は何事もなく過ぎて行つた。側役になつたからといって、特に一緒に過ごすというわけではなかったからだ。

それでも三日に一度は大巫女のもとで二人そろつての修業が始まつた。

宮の歴史や村について、力について、薬や自然の営みについてなど大巫女自らが語るそれは多岐にわたつた。シュカやアサギは疑問を問い、大巫女から考えを問われながら学びを深めていった。

大巫女は間違つた答えを言つても決して怒らず、じっくりと考えを述べ、シュカやアサギのその答えに至つた道筋を丁寧に問いながら正しい道筋へと導いた。

シュカはそうした学びを大変好んだ。もともと落ち着いた表情の下に強い好奇心を秘めている少女だつた。知りたいことを泉のように沸かせていたシュカにとって、様々な答えを得られるこの時間は夢のように楽しかった。アサギは聡明で、考えに道筋が立っていた。

シュカは、アサギから発せられる嫌悪の気配に気まずさはあつたが、知識豊富な言葉に感心することが多かった。

アサギにとつても本来なら大巫女の側役として自分だけが、大巫女の話聞くはずだつたのにという思いは消えていなかったが、物事を柔軟にとらえ自分では思いもよらなかつた発想をするシュカのことをまた違つた目で見ることにも出てきた。

「でも、うらやましいな。シュカ。アサギ様がおそばにつかれるなんて。」

朝の水汲みは相変わらずで、でも当初に比べたら随分と時間をかけずに往復できるようになっていた。アサギがシユカの側役になったということは公に発表されたわけではなかったが、この前遅くまで部屋に帰ってこなかったシユカを心配してくれたり、シユカが修行で抜ける分の仕事をこなさなければならぬウミには側役の話を伝えた。

そのあとの廊下での出来事はなんとも言えなかったが。しかし、ウミの今の言葉に言わなくてよかったとシユカは思った。

「うらやましい？ どうして？」

「だって、あのアサギ様よ。とても素敵な方じゃない。背も高いし、男前だし。まあ、私たち巫女とどうにかなることはないけれど、とてもお優しいから巫女たちの間でも人気なのよ。」

巫女は嫁ぐことはない。嫁ぐためには宮を出なければならぬ。だからここでアサギが巫女を選ぶことはないということなのだろう。

「あの方はお優しいの？」

シユカはウミの抱くアサギの姿と自分が目にしたアサギの姿とがあまりにも違うことに驚いた。

「お優しいわ。私たちが会えることは滅多にないけれど、お会いした時には必ず声をかけてくださるし。たまにお手伝いくださることだってあるのよ。いつも柔らかい声で穏やかに話されるの。それに、私たちにもきちんと礼を尽くしてくださる方なのよ。」

確かに大巫女様を前にした時のアサギは穏やかではあるが、激しい一面を目にしたこともまた事実。どちらが本当のアサギなんだろう。「お優しいだけじゃないの、武にも長けていらっしやるのよ。剣の腕はハヤテ様に次ぐようだし、弓矢は下の村でも一番らしいわ。」シユカはウミのその情報量に唖然とした。

「くわしいのね。」

「そうかしら。んー、そうね。働き手の女の子がいろいろと教えてくれたのよ。ほら、あなたが来るまでは私も同じくらいの巫女がいなくて一人だったでしょう。働き手の女の子と仲が良かったの。」

ということとは、アサギという男は働き手にも好かれているということか…。もしかして、私は特別に嫌われているのだろうか。

シュカは身に覚えのないアサギ過剰な嫌悪に疑問を持つようになっていた。

それに加えて、どんなにアサギが嫌悪の表情を投げかけてきても薦が動き出さないことも不思議だった。アサギに反応したのは最初に会ったたった一回だけ。敵対する者には激しく動く薦にしては珍しいことだった。私が警戒していないということなのか、それとも…。

午前の仕事をひと段落させ、休憩が終わるとシュカは腰を浮かせた。今日は大巫女の部屋での修行の日だ。

「じゃあ、ウミ。行ってくるわ。」

柱にもたれてウトウトしかかっていたウミに声をかけると、ウミは眠そうにこすりながら見送ってくれた。慣れたとはいえ重労働。昼の休憩時間は貴重なのだ。

「ええ、いつてらっしゃい。がんばってね。」

シュカは少し急ぎ足で大巫女の部屋へと向かった。扉の前で呼吸を整え声をかけると部屋に入った。

シュカが部屋に入ると、すでにアサギは座敷に座っていた。背筋をすっと伸ばし、きりつと整った顔で大巫女を見つめる姿は、なるほど確かに素敵に見える。こうしてみると人気があるのはうなずける。シュカはあいさつで頭を下げながら、村にこんな人がいたらヒマリなどは黙っていいいだろうな、などのんきなことを考えていた。

「遅くなりました。シュカでございます。」

「待っていました。お入りなさい。」

シュカはアサギの隣に座った。というか、そこにしか座れないくらいの大きさの部屋なのだ。

シュカの視線に気づいたのか、「遅い」というような鋭い視線をアサギが投げかけてくる。

シュカは待たせてしまったことを軽く頭を下げて詫びた。

二人が正面を向くと、大巫女が口を開いた。

今日の学びの内容は何だろう。この前はこの宮の森でとれる薬草についてだったので、動物のことだろうか。などとシュカは心をわくわくさせながら大巫女が内容を告げるのを待っていた。

「今日は、最近の国々について話そうかと思う。」

大巫女が自然や宮、宮の歴史以外のことを話すのは珍しい。新しい話シュカは身を乗り出した。しかし、なぜかアサギの気配が少しだけ鋭くなったのを敏感に感じ取っていた。

（28）二人の修行

（28）

「シュカはクニとはどんなものか知っているか」

大巫女の穏やかな問いにシュカはしばし考え答えた。大巫女はシュカが考える間を決してせかしたりはしない。シュカはいつも安心して考えることができた。

「クニは村がいくつも集まったものだと言いました。」

「うむ。ではシュカが以前暮らしていた村は、クニの中にあつたか。」

「いいえ。私の村は近隣の村と一緒に祭りなどを行うことはありませんがクニではないと思います。」

「それはなぜだ。」

「クニは、一人の首長が治めていると聞いたことがあります。私の住んでいた村にはそれぞれ長がいました。その長同士も平らな関係だったと思います。ですからクニとは違った集団だと思います。」

「そうだな。シュカの育った村と近隣の村はお互いに協力関係を上手に保ちながら集合体を作ってくらしておる。」

大巫女はシュカの答えに満足げにうなずくと、今度はアサギに問いを投げかけた。

「では、アサギに聞こう。クニはもっと詳しくいえばどう説明する。」

「はい。クニとはシュカの言った通り村が集まったものですが、武力に強い首長の治める村が周りの村を飲み込みながら大きくなったものです。もともとは村の民が増えた結果、耕す土地を拡大するための抗争が進展し、その結果村の外の土地を奪いながらクニとして広がって行きました。ですから、クニの中には勝者と敗者が生まれ、

戦に負けて吸収された村の中には奴隷となったものもあると聞きます。」

大巫女は口をはさまず最後まで聞くと、ゆっくりと頷いた。
「うむ。その通りだ。」

シユカはアサギの言葉を聞きながら脳裏にひとつの場面を思い浮かべていた。

幼い子供の白く焦点のあわない瞳。生気のない顔。

その母の・・・死に顔

あの子はそういった戦の中で母を失ったのか。

あの時の少年の切り裂かれたような渴きにも似た痛みがよみがえり、シユカは胸元をぎゅっと握りしめた。

「戦に負けるとはどうなったときに決まるのですか。」

戦に巻き込まれたことのないシユカには、現実の戦を知らなかった。

「戦の負けは村の長が負けを認めるか、闘って全滅させたとき、村全体を敵方に占領された時に決まる。そこで求められるのは武の強さだ。」

アサギの言葉にシユカはさらに握りしめた手に力を込めた。

シユカの指先は白くなっていた。

「私は、この宮へ来る途中に戦で負けた村を見ました。建物は焼け落ち、人びとは疲れ果て、子どもに希望はありませんでした。細々と店をしていたあの人たちは奴隷なのですか。」

アサギは実際に見たわけじゃないから確かではないがと前置きをして語った。

「その村にいて、そうして暮らしていたのであれば奴隷ではないと思う。奴隷になった人々の多くは広くなった農耕地を耕しそこでとれた作物を首長にささげるのだそうだ。そのほかに勝った村の人々

に使われたり、他のクニとの交渉に使われたりするという。」

「そんな・・・ひどい。」

シユカはうつむいた。こみ上げる涙を必死に抑える。人が人を使うなんて・・・。

シユカは泣かないようにぐっと目に力を込めるともうひとつの疑問を投げかけた。

「では、十分な土地もあり近くに水もあるのに土地がやせ、農耕がおこなわれていなかった村はどうしてなのでしょう。」

「それは多分、戦によって働き手が失われせつかくの土地も耕せるものがいなくなったのだと思う。そうした土地も増えていると聞く。」

農地を手に入れるための戦であったはずなのに、戦が終わってみればそれを耕すものがない。何のための戦だったのか。これではただの殺し合いだ。何の意味があるのかシユカには到底理解できそうになかった。

「シユカ、戦で最も傷つくのはだれかの。」

「・・・こどもだと思います。」

「そうじゃ。幼子は戦によってすみかも、家族もなくすものが多い。しかしな、本当に恐ろしいのは幼子がなくすのが人やものばかりではないということじゃ。争い、殺しあう姿を見た子が大人になったときどのような大人になるのか・・・。守られるべきものが一番傷つくのじゃ。」

「シユカ。信じたくないかもしれぬが、これが今の世の現実じゃ。クニは数年前わしの目の届くだけでも20を超えていた。しかし、今クニは10あるかないか2まで減っておる。これがどういうことだかわかるか。」

シユカは頭を働かせた。20あったクニが10になった。クニとしてうまくいかなかった・・・。分解したのだろうか・・・。し

かし、数年のうちにそんなに多くのクニが分解するとは考えにくい。……。さっきのアサギの言葉がよみがえる。『奴隷は他のクニとの交渉に使われる』

「村を吸収して土地を広げていたクニが、今度はクニ同士の争いを始めたということでしょうか。」

「うむ。そうだ。いま急速に国同士の争いが激しくなっている。10余りのクニの中でも大きな力を持っているクニが生まれておる。そのクニの目的は何かわかるか。」

シユカは頭を巡らしたが、争いの原因など思いつかばなかった。

「わかりません。」

シユカは首振ってこたえ、大巫女に答えを求めた。

「それは権力と支配だ。一度勝ち権力を手に入れたものは欲が出る。権力はときに人を狂わせる。増えた人を養うための土地も必要となる。戦は自分の強さの誇示じゃ。自分に傳くものを増やしたいという欲望に逆らえなくなっておるのかもしれない。」

大巫女の言葉はシユカの胸に重く響いた。

(29) 湖のほとりで

(29)

シユカは湖のほとりにやってきていた。西の山際に真つ赤な夕日がかかっている。

山の縁を焼くように一面を赤く染めていた。

頭上にあつたところよりも大きく揺れているその陽をシユカはじつと見つめ大巫女の話とあの少年の記憶を交互に思い出していた。

あの時の少年は今、どうしているのだろうか。あれから笑うことができただろうか。

あの少年の記憶では村に火が放たれてから、村が落ちるまではあつという間だった。

しかし、現実には村が再建するのには時間がかかる。人に付いた傷がいえるのにはもつと時間がかかるだろう。それが心に付いた傷だとするならばその比ではないはずだ。

本来なら傷をいやしてくれるはずの親も戦に奪われたあの少年に傷のいえる日は来るのか……。

私があそこで情けなく逃げ出してしまわなかったら、何か出来たかもしれないのに。いや、何か出来たかもしれないというのもおごつた見方なんだろうか。

『戦は自分の強さの誇示じゃ。自分に傳くものを増やしたいという欲望に逆らえなくなつておるのかもしれんな。』

誰かの欲望のために多くの人の血が流れる……これが本当に現実なんだ。実際に血が流れた所を目にしたわけではないのに、シユカは恐怖で身が震えそうだった。

そして、何もできない自分が情けなかった。大巫女の話聞けば聞くほど知識が増えてくる。その分、じあぶんが情けなくも無力であることも思い知っていくような気がする。

がさっ

後ろの林が小さく音を立てる。しっかりとした足取り、一定の歩幅。この足音は多分……。

「おまえ……。こんなところで何してるんだ。」

聞きなじんだ声がする。シユカが振り返ると、そこに立っていたのはもしかしくなくてもアサギだった。

「アサギ様……。」

「仕事には戻らなくていいのか。」

咎めているわけではないのだろう、アサギは穏やかな声で聞いた。

「今日は午後の修行のために仕事は午前中に全部終わらせていたんです。」

そうかと云ってアサギはシユカの方を見ずに歩を進めた。

「なあ。」

「はい？」

シユカはアサギの横顔を見ていた。アサギは相変わらず前方を見つめたままだ。

「今日の大巫女様のお話、お前はどう思った。」

「クニの話ですか……。戦までしてクニを大きくしたい者の気持ちは私にはわからぬと思いました。畑が足りなくなれば開拓すればよいのに……。ほかの者の土地を奪おうというのはどうしてなのでしょう。私には戦は得るものよりも失うもののほうが大きいように思います。」

「どこでも耕せば畑となるとおぼかりではない。幸いこのあたりやお前の住んでいた場所は水源も近く土地も肥沃だが、そうでないところもある。それに……。戦って勝つことの高揚感は、戦ったものにしかわからないのかもしれないな。」

「大巫女様は私たちに本当は何を言いたかったのでしょうか？ 私がめぐまれているということでしょうか」

「いや、そうではないと思う。……父の治めるこのあたりは村

としては大きい。土地も豊かだ。ただし、村として裕福というわけではないが。・・・この村は昔から他の村と交わることを断ってきた。もちろん、いさかはや奪い合いも決して行わずにきた。それはなぜかわかるか。」

シユカの住んでいた村は養蚕のおかげもあつて少しだけ豊かだった。しかし、近隣の村と協力をしながら生活することであるいろいろなことを円滑に行っていた。そういった集合体があるのが普通なのだ。

クニはそういった集合体の中から力をつけた村が周りの村を飲み込むようにしてできたものなのだ。

アサギはこの村はそういった集合体に属さないということ saying しているのだ。宮からでは下の村の様子は分からないので村が独立していることをシユカは初めて知った。

「戦を回避するためですか？」

シユカの答えにアサギは苦笑いをした。答えがずれていたらしい。

「まあ、そうなんだが。どうして戦を回避したいかということだ。実は宮があるためなんだ。」

「この宮でございますか？」

シユカにはアサギの言っている意味が分からなかった。アサギはそんなシユカの疑問が分かっていたかのようにうなずいた。

「宮のためというか、巫女や巫女によってもたらされるものを守るためだ。」

何も言わずじつとアサギを見て続きをつシユカを横目で見るとアサギはつづける。

「宮には巫女がいる。巫女たちはそれぞれいろいろな村やクニからやってきたものだが、みな力を持ったものばかりだ。巫女はここでその力を伸ばし使い方を学び正しく使うために修行をしている。正しく使うためにだ。」

シユカはうなずく。

「巫女の持つ力は使い方次第で力は人を助けも陥れもする。それを

使うものの人となりが大事なんだ。だからここで修行を行うし、大巫女様は力よりもむしろ力を使わない生き方に重きを置いて教えを行っていらっしゃる。必要以上の力を大巫女様も歴代の長も使わせなかった。しかし、その力を悪用しようと思うものは実は少なくない。これだけの巫女がそろっているのだ、宮はたびたび標的にされてきた。その力を奪おうとする者たちに。だからあえてこの村はひとつそりと独立しているのだ。この村はいわば宮の砦、宮を守るためにあるんだ。」

力は使い方次第で悪しものになる。それはシュカ自身もこの宮に来て学んだことだった。

ここでの修業はどれもそれを正しく使えるようにするための自分自身を鍛えるものだった。

「では、大巫女様はこの宮がはらんでいる危険をしっかりと受け止めよとおっしゃりたかったのでしょうか。」

アサギは押しだまつた。

いつのまにか眉間にしわが寄っている。アサギがじっと見つめる湖の向こうには気づけば太陽がすっかり隠れている。空だけがうつすらと赤いが、だんだんと暗さが深くなっていた。

「今日の大巫女様のお話の中にここ数年でクニの数が減っているという言葉があつたのを覚えているか。」

「はい。・・・今は10ほどのクニがあると。」

「そうだ。10ほどだというお話だった。しかし、最近その様相が変わってきた。それなりに安定していたクニらの中にここ半年ほどで大きく力を伸ばしているものがあるのだ。」

アサギの鋭いまなざしがうす暗い中にやけに光って見えた。シュカは相槌も打たず、黙ってアサギの話を聞いていた。

「サンカデと呼ばれるクニだ。もともとは西にある小さな村だったらしい。首長が代替わりしたのが半年前。それから急激に勢力を増している。西にあった三つのクニがこの半年の間にサンカデに飲み込まれたという話だ。」

「新しい首長が領地の拡大を進めているということですか。」

アサギはシュカと目を合わせて頷いた。

「ああ。新しい首長はまだ若い男だということだが、戦に長けていてねらったところは必ず落とす冷徹な男らしい。やり方は徹底しているという。10ほどのクニでそれなりの均衡を保っていたんだ。ひとつのクニが拡大するということは均衡が崩れるということ。均衡が崩れれば、なし崩し的に戦に発展するだろう。」

シュカはその様相を想像し、息をのみこんだ。戦が激しさを増せば、あの少年のような子どもが増える。

「そして、サンカデがこの宮をねらっているという話があるのだ。もし、それが本当ならばこの宮が飲み込まれるのは時間の問題。もはや父上の交渉などでとめられないほどサンカデの勢力は巨大化しているんだ。」

どつくん シュカの胸が大きく鳴った。

シュカは胸元の着物をぎゅっと握りしめた。背中には気持ち悪い汗が伝っている。

視界がだんだんと揺れ始めた。・・・あつ倒れる。

シュカは白んでいく意識の中で蔦が自分を包み込むように一気に伸びるのを感じていた。

ゆっくりと自分が傾いていくのが分かる。

意識が飛ぶ瞬間、耳に聞こえてきたのは「シュカ」という声だった気がした。

(30) 白い靄の中で

(30)

そこは薄白い靄^{もや}につつまれているような不思議な空間だった。

壁も床も天井も、目に映るすべてが白く見える。

すぐ近くにあるのに、どれだけも遠くにいるような不思議な感覚だった。

シュカは真っ白な壁に手を伸ばそうとして伸ばす手がないことに気がついた。

ああ、これは“アレ”だ。シュカの意識は自覚した。修行の成果なのかシュカは存外冷静だった。落ち着いてここは誰のものだろうと視線をただよわせた。

広い板張りの部屋は大きく開け放たれた廊下の方から心地よい風が吹きこんでいた。よく見ればそこには扉がなく、爽快な眺めが広がっていた。ここは・・・とても高い所にあるようだ。

シュカはふと足があるはずの床に視線を下ろした。真っ白だと思っていた板間の上に何かが描いてある。シュカがよくよく目を凝らすとこれは地図・・・。

白い床に細い朱で描かれた地図にはところどころに修正が加えられながら少しずつ大きくなっていた。

これは・・・。

ギシツという音とともにその部屋に誰かが入ってきた。

シュカは振り向き目を凝らす、靄が強くてよく見えない。まるでその人物を隠すかのようにその人物の周りにまとわりついていた。どんなにさわやかに風が吹いてもその靄が取れることはなかった。

その人物は部屋の真ん中までやってくると描かれた地図の前に腰を下ろした。

細く白い指を伸ばすと、朱で描かれた地図をゆっくりとなでた。そ

の所作は何とも艶やかで美しかった。

顔は靄で見えないにもかかわらず、シユカの中にこの人物が自分を惹きつけてやまないという予感めいたものを感じていた。

歩き方と背格好からその人物が男性であることが何となくうかがえた。靄の向こうにうつすらと見えるのはずっと細身の体格とこれまた真っ白な着物だった。

白は死者の色だ。人が亡くなると白い装束を身につけ死者の国に旅立つのだ。

白装束は不吉なものだから普通の人は普段の生活で身につけたりしない。シユカたち巫女が白い着物を身につけるのは神に仕えるという象徴だからだ。巫女でさえ、下に赤い袴を穿く。

しかし、この人物は全部が白かった。

雲の上にいるような建物。死に装束の青年。靄に包まれた部屋。まるでここは死者の国のようだとしユカは思った。しかし、なぜ自分にこの風景が見えるのか。

誰の記憶なんだろう。シユカはおばの記憶を望んだときとは違うと感じていた。

おばの時には、おばの目で見ていたような感覚だった。加えて断片的に記憶をめぐっているような感じだった。しかし、この光景には時間がきちんと流れている感じがする。それにシユカの思うように動くことができる。誰かの目を通しているわけではないようだ。

シユカは目を凝らした。シユカの周りにいる人物は一人しかない。どうであってもこの男に関係があるのだろうか。

靄の中にうつすらと頭が見える。シユカはその髪の色にびっくりした。後ろにひとくりにされているその髪は白、いや銀と云っていいだろうか見たことのない色をしていた。伸びた背筋を考えると老成の白髪とは違うのだろうか。

首元には黒い刺青が見えた。ということは成人を迎えているということか。しかし、こんな模様は見たことがなかった。シュカの育った地域の模様ではないようだ。

これが現実のことなのか、過去のことなのか判断がつかずシュカはただ目を凝らすしかなかった。

シュカがもつとよく見ようと男に近付こうとした時だった。

どたどたとした足音ともに、天空の部屋にやってきたものがいた。走ってきたものは、部屋の縁に膝をついた。

やってきたのは、部屋の男とは対照的ながつしりとした体つきの男だった。頭を下げた様子から、部屋の中の男が主なのだろう。

やってきた男は顔をあげると部屋の男に何かを報告し始めた。

その眼光は鋭く、頬には刀傷と見える古い傷が見えた。年はハヤテと同じくらいだろうか。男は屈強という言葉がよく似合いそうな雰囲気を持っていた。この男の首筋にも部屋の男と同じように刺青が見える。そして、むき出しになった力強い腕にも刺青が見えた。

「・・・様。・・・の場所を知っているものを・・・」

男の声は風にかき消されるように不安定で聞き取りにくい。

やってきた男はだれかを捕えたという報告をしているようなのだが、シュカの耳にはとぎれとぎれにしか聞こえなかった。

自分の力が不安定だからか、力が及ばないくらい古い記憶か、はたまた力で追いつけないほど遠いところなのか。シュカは気持ちを集中させ耳を傾けた。

すると、先ほどの部屋の男が答える声が聞こえてきた。

「・・・・・・・・・・。・・・した者を向かわせる。確証が取れたらわれもそちらへ赴こう。」

次第にはつきりとシュカの耳に聞こえた声は、若い青年の声だった。落ち着き払ったその声からは感情が見えないが、シュカの中に小さな波の立つ声だった。

「はっ。了解いたしました。こちらはいつでも出立できるように準備を行っております。確認次第出陣できるようにいたします。」

「そうだねえ。あちらには弓の使い手がいるらしいから、こちらも良い者をそろえて置いておくれ。」

「すでに、腕の確かなものを用意しております。」

靄の向こうで口元をにやりとあげるのが見えた。

部屋の男は冷静でありながらも戦の準備を喜びを持って整えさせようとしている。

男のその冷徹で奇妙な興奮を感じ取ったシュカは、背筋を震わせた。男のその声は艶やかでありながら冷たい。そして、少しの愉快さを含んでいた。

部屋の男は地図をまたゆったりとなでた。

「またここが広がるかな」

主のその言葉に膝をついた男が片方だけ唇を上げ、満足そうに笑った。まるでもう地図が広がったかのような確信に満ちた頬笑みだった。

よほど自信があるらしかった。

「しかし、ご機嫌でございますね。何か良いことでもございましたか、ヒナタ様。」

ヒナタ…この主の名前はヒナタと云うらしい。シュカは小さくヒナタとつぶやいた。

ぼうつとヒナタと小さく繰り返していたシュカは次のヒナタの言葉にビクツとした。

「ああ、ここにかわいらしい鼠が紛れ込んでいるようなんだ。」

「ねずみ・・・？」

ヒナタはゆっくりと視線を上げた。いや確かには靄で隠されているのでその気配だけを感じ取ったのだが、そのまなざしは確実にシュカを捕えていた。

シュカは底に自分自身がいるわけではないことを十分わかっていたが、自分の周りをふるふると見まわした。やはり自分以外の誰も、

何もいない。

シュカは見つめられているだろう靄の向こうをじっと見つめた。鼠とは・・・自分のことなのだろうか。

するとまとわりついていた靄がゆっくりと溶けるように消えていった。

シュカは現れ出た男の顔から目が離せなかった。

そこには見知った顔がのぞいていたのだ。

『・・・ト・・・トウヤ。』

男の顔はトウヤそのものだった。いや、違う。トウヤよりも幾ばかりか年かさがある。

トウヤとは別人だ。ヒナタと呼んでいたではないか。

シュカは自分の心に言い聞かせるようにそう心で唱えた。

そのくらい男の、ヒナタの顔はトウヤそっくりだった。トウヤがあと5年過ぎたら絶対にこんな顔になる。そう思わせるくらい瓜二つだった。

「そうそう、云い忘れたよ。ゲノ、あちらへ行くときには、たくさん籠を用意しなくちゃね。」

「籠でございますか？」

「そう。籠だよ。」

そして、ヒナタはまっすぐにシュカを見て、絶対に視線をそらさないまま言い放った。

「あちらには、きっとわれの役に立ってくれる“巫女”とやらがたくさんいるらしいからね。力はとても強く正確のようだよ。けがなくわがサンカデにお招きしなきゃねえ。」

ヒナタはにこやかにシュカにほほ笑みかけた。しかし、その目は尖った黒曜石のように鋭く黒かった。

シユカはヒナタの言った意味を瞬間的に理解し、ここがどこであるのかを正確に判断した。

判断した瞬間、男も地図も部屋さえもが刹那の内に消し飛んでいた。

心臓がドクンツと大きく波打つを感じる。

“怖い”

なんとということだろう。あそこは、サンカデの若き首長の部屋だったのだ。

あの地図は拡大した自分の領地を見るものなのだ。

ヒナタは自分がのぞいていることを知っていた。

分かっているわざと見せたのだ。これから何が起こるか、知らせるために。そして、抵抗が無理だということを知らしめるために……。

シユカは愕然としたまま自分の意識が遠のいていくのを感じていた。早く知らせなくては……。

宮が……宮が攻め落とされる。

(31) 心配

(31)

ふと気付くとシユカの体がゆらゆらと揺れていた。

小さな揺れだったそれがぐらつと大きな揺れへと変わり、頭が前に揺らいだかと思うと膝から崩れるようにおちた。

アサギは寸でのところでシユカの背に手を伸ばすと膝について抱きかかえる。

アサギが手を伸ばしたと同時に、シユカの体を駆け巡るように体中に蔦が這った。

シユカの髪が舞い上がり、シユカの顔を隠した。

アサギはシユカを抱きかかえたまま、シユカの顔にかかった髪を空いた左手で払おうとして、手を止めた。

髪の下からは青白い顔がのぞいている。透き通るようなその白さにアサギは少々たじろいだ。元気そうに見えたが、いきなり倒れるほど疲れがたまっていたのだろうか。決して血色がよいとは言えないその顔は、しかし穏やかな表情だった。

アサギは慎重にシユカの額をなでるように顔にかかった髪をどかした。その指がくすぐったかったのか、シユカの眉間にしわが寄る。

穏やかな顔の時よりも眉間にしわを寄せている今の方がなんだか彼女らしいとアサギは思っ苦笑いをした。

何をそんなに意地になっているのか、アサギに見せるシユカはいつも眉間にしわを寄せて緊張した面持ちだった。

遠目から見るシユカは笑顔で周りに接する癖に、自分の前だといつも緊張の面持ちで自分に笑顔を見せたことがない。

それが自分のせいであることをアサギはよくわかっていた。

しかし、いまさらながらにそれを後悔する自分もいることにアサギ

は気付き始めていた。

アサギはシュカのひざの裏に腕を通すと軽々と持ち上げた。普段はシュカたちが重い水の桶を運んで上がる道をシュカを抱えてアサギが上つていくが、いつものシュカの足取りとは対照的にアサギのそれは軽かった。

シュカを抱えたまま、土間をのぞいた。夕餉前で土間には忙しく働くかまど番などが働いている。そこに見知った顔を見つけて、アサギは声をかけた。

「ウミ。ちょうどよかった。彼女を・・・。」

ウミはアサギの声ににこやかに振り返ったが、アサギの抱えているものが目に入った途端アサギに駆け寄った。

「シュカ！！アサギ様、シュカはどうしたのですか。」

普段は落ち着き払って、アサギには可愛げがないように見えるシュカだがこうして瞳を閉じた姿は年相応に見える。そういえばまだ14ばかりだったのだなと、ハネの部屋に寝かされたシュカの顔を横目で見ながらアサギは考えていた。

「それで、シュカは話をしている突然倒れたということなのですね。」

アサギは質問に、ウミの方に目を向け頷いた。

「ならば、薦も出ているし多分何かを視ているのだろう。それについてとは問題ないと思うのだ。」

答えたのはハネだった。アサギは病でないことを聞かされ、少し安堵した。

「問題は、何を視ているかということだ。何かに触れたり、出会ったりしてはいないのだな。」

「はい。近くにいたのは私だけです。私も触れてなどおりません。」
「そうか……。では手がかりとなるのは何を話していたのかということになるのだが。」

アサギは、その問いに思わず口ごもった。ここにはウミもいる。正直に言ったほうがいいことは分かっているのだが、ハネにしてもサンカデについての情報を得ているかどうかはしれない。下手に不確かな情報を与えてもよいものか。

アサギは自分の正座した膝のあたりに視線を移し、しばし考えた。

ハネはアサギのその様子に眉を寄せる。

「何か云えぬことであるのか。」

「……。いえ。」

アサギは否定しながらも口を開けなかった。

アサギが逡巡していたときだった。シュカの睨みがピクリと動くのがアサギの目の端に見えた。

「……。シュカ。」

アサギの声にウミとハネもシュカに寄った。

「シュカ……。大丈夫？」

ウミの心配そうな声に、瞬きを二、三度すると黒眼をゆつくりとウミの方へ向けた。

ボーとしたその表情からまだ完全に覚醒していないのが見て取れる。

「シュカ、大丈夫ですか？」

ハネの言葉に今度は視線を反対側のハネに向けると、ハネの顔を認識しシュカは目を見開いた。

そして、勢いよく起き上がるとめまいを起こしてハネの膝に崩れた。

「シュカ、大丈夫か。そのように勢いよく起き上がるでない。いかがした。」

ハネはシュカの肩を支えるようにつかむと顔を覗き込んだ。

「ハネ様！大変でございます。宮が！宮が！」

シュカは訴えかけるように、声を上げた。

アサギははつとしてシユカに詰め寄った。

「シユカ、落ち着くんだ。息を整えろ。」

左の肩を掴んで自分の方に向き直させると、アサギは目を合わせて言い聞かすようにゆっくりとしゃべった。

シユカはアサギの真剣な目に、いったん目を閉じると胸に手を置いて呼吸を整えた。

そして、ゆっくり目を空けるとじつとアサギを見つめた。

「アサギ様、アサギ様の言われたことが現実になりそうです。」

シユカは小さく唇をふるわせながらもしっかりした口調でアサギに伝えた。

「まことであるな。」

アサギの言葉にシユカは一瞬不安げな表情を見せたが、すぐに顔を引き締めると頷いた。

アサギもそれに答えるように力強く頷き、ハネの方へ向きなおった。

「母上、至急大巫女様へお目通りをお願いいたします。それと父上もお呼びいただけないでしょうか。」

ハネは、アサギの真剣な目を見つめると。ここではこれ以上を語らないことを悟り、小さく息を吐いた。

「分かったわ。ウミ、ハヤテに連絡をして頂戴。大巫女様のところには私が参ります。」

「わかりました。」

ウミはすぐさま立ち上がると戸の外へ出て行こうとした。アサギはその後ろ姿に声をかけた。

「ウミ、申し訳ないが宮の他のものに伝わらないように動いていただけないか。」

ウミは振り返ると小さく頷き、戸の外へと消えた。

(32) 告白？

(32)

ウミがハヤテの所に行っている間にシユカはずいぶんと落ち着き、ほほの色も桃色に戻ってきていた。

ハネが大巫女との目通りを取り付け帰ってくると、アサギとシユカも大巫女の部屋へと向かった。

大巫女の部屋はいつもと全く変わらず、こぢんまりとしていて暖かだった。

思えば、ここでクニについての話を聞いたのは今日のことだった。ほんの何刻か前にはここに座っていたのが信じられないくらい時間がたつたような感覚だった。

シユカとアサギは大巫女に直面すると、頭を下げた。

部屋には大巫女のほかにハヤテとハネもそろっていた。ハヤテはシユカのよく知っている穏やかで優しいハヤテのそれではなく、領主としての厳しい表情をたたえていた。

シユカは自分が視たことを出来るだけ細かく事実を忠実に伝えようと思っていた。

自分の感情に偏った見方にならないよう、気をつけながら一生懸命話すように努力した

館の様子やそこにいた人のこと。状況やどんな話をしていたのか・。事細かに思い出しながら懸命に伝えようとするシユカの必死な様子に周りの大人たちも静かに耳を傾けていた。

自分が視たということは本当であるがそれが現実のものだということとを証明するすべはない。自分の話していることをみんなが信じてくれるのか、いや、もしも少しでも宮に危険が迫っているのならばなんとしても信じてもらえるようにシユカにできるのは一生懸命話

すしかないのだとシユカは思っていた。

シユカの話を実剣なまなざしで聞いてくれるみんなにシユカは感謝しつつ不安な心を押さえながら話した。

しかし、『ヒナタ』と呼ばれた青年が自分のよく知っている少年に瓜二つだったということはどうしても、どうしてもいえなかった。

一方アサギは、シユカの横に座ってシユカの話に耳を傾けながらもじつとハヤテや大巫女の表情をうかがっていた。アサギが事前に手に入れていた情報とシユカが今しゃべっている内容を合わせればサンカデが宮や村を探しねらっていることは明らかだった。

アサギには大巫女や父がどのように考えをもっているのか分らなかった。自分が持っている情報を知らないとは考えにくいだが、それ以上のどんな事を知りどんな判断を下すのかアサギは注意深く二人の様子を見ていた。

シユカの話に表情豊かに反応を見せる母とは対照的に、父も大巫女も表情一つ変えず、ただ黙々とシユカの話に耳を傾けていた。しかし、シユカが館の中にいた青年の容姿を事細かに説明したときごくわずかだったが父の表情が変わったのをアサギは見逃さなかった。その一瞬の表情を見てアサギは、父が『ヒナタ』と呼ばれるサンカデの首長についての詳しい容姿などについても知りえていたことを悟った。そしてシユカの視たものが現実に存在し、宮に本物の危険が迫っているのだという子を知らしめていたのだった。

「あの人は私が視ていたことを知っているような口ぶりでした。もしかしたら、私にわざと聞かせていたのではないかとも思いました。でも……私が視たことが本当ならば宮に攻めてくるのでしょうか。ヒナタの言葉には確固たる自信がにじみ出ているように感じました。」

シユカは自分が視たものをすべて話し終わると、ゆっくりと息を吐き出した。

無意識にとりのアサギに目をやると、アサギと目が合う。アサギは真剣な表情のままシユカに小さく頷いた。そんな小さなしぐさでもシユカにとってはとても心強く、すっかり緊張し冷え切っていた胸の中が少し暖かくなるのを感じた。

二人は、大巫女やハヤテの反応を待った。

二人の表情からは考えが見えそうにない。黙り込んだまま、時間が過ぎていく。どれくらい経ったのか、シユカには判断もつかないくらい長くも短くも感じる時間が過ぎて行った。

「・・・ハヤテ。」

大巫女が唐突にハヤテを呼んだ。ハヤテが大巫女に近付くと耳元に何かを言っている。

狭い部屋にもかかわらず大巫女の声は何故か二人まで届かなかった。アサギはじつとその様子を見ていたが、ハヤテはハネを伴うと結局何も言わないまま大巫女の部屋を出て行ってしまった。

シユカの心の中に自分の話が伝わらなかったのかという不安が頭をもたげた。

残された二人はことばも出ず、かといってここを立ち去った方がよいのかも分からずじつと黙って座っているしかできなかった。

どうなってしまうのだろうか。シユカの心の不安はだんだんと広がっていった。

シユカがアサギを見やると、アサギは物言いたげな怒りのこもった目をして大巫女の後ろの壁を睨みつけていた。

「シユカ・・・。」

どれくらいだったのだろうか大巫女が声を発した。

「・・・はい。」

「お前たちに話しておきたいことがある。」

大巫女の静粛とした声に二人はハツとし、姿勢を正した。じつと二人の視線が大巫女に向かう。

「シユカ、おぬしがここを出て育てられた話はしたと思うが、おぬしはどうしてここで生まれたのかは知らぬままだったな。」

シユカは無意識に唾を飲み込んだ。ずつとずつと知りたかったことが今大巫女から明かされるかもしれないと思うと胸が震えるのを感じた。

自分の視たものを話しに来たはずだったのに、どうしてこんなことになっているのだろうか。はぐらかされているのか・・・、それとも何か自分の道物と関係があるのか・・・。

どちらにしても、大巫女からこうして自分の出生のことを聞ける機会はない。

シユカは深呼吸をすると大巫女が話し始めるのを待った。

「あれは、15年前のことだった。もうすぐ春がやってくるという暖かくなりかけた日の朝、その娘はこの宮の下、ちょうど船着き場になっている棧橋に着いた小さな船の中で見つかった。まだ少女らしさを残したような娘はまだ19だったよ。黒髪が艶やかでね、色の白い美しい娘だった。娘は見つかったとき、意識を失っていたんだ。まだ寒い中一人で夜通し船を漕いできたんだろう、えらく衰弱していたよ。最初はみんな巫女になるためにやってきたと思った。しかしね、娘一人でこの宮に来るといふのはなかなか珍しいことなのだ。この宮のことは公にされてないからね。大概は村などの長の手でここに連れてこられるのが普通だ。噂を知っていてもここまで19の娘が一人でここまでやってくるのは至難の業だ。皆がこの娘がどこから来たのかどうやってきたのか不思議に思った。娘は、一応宮へ連れ帰られ介抱された。なかなか目を覚まさず皆は心配した

ものだ。なにせ、ここにはすぐに呼べる医者もないからね。しかしね、娘の世話をしていた巫女が気付いたのだ。・・・・その娘が子を宿しているということを。」

[illegible]

まだ、目を覚まさぬ娘の元へ近寄るとそのはらかに力強い光がこぼれているを感じた。大巫女は手を伸ばし、娘の腹に当てた。あてた手には暖かく、力強い鼓動が伝わってきた。

娘は巫女たちの献身的な看病によつて、それから三日ののち目を覚ました。

「実は、私がこの子を宿した頃から夢で不思議なものを視るように
なりました。」

憂いを帯びた表情が印象的な娘だった。

「不思議などは、どのようなものなのだ。」

「それは、時に草原だったり、滝だったり、広い座敷だったりしました。私の見たことのない風景や人ばかりでしたが、いつも同じ人の目を通して思いました。……来てみて、分かりましたがこの宮の風景や大巫女様の姿もありました。」

「なぜ同じ人の目を通しているとわかるのだ。」

「目線が同じなのです。それにたまに視界にその人物のものとかわれる手や足が視えました。ちょうど自分の手や足を見下ろすように。それでこれはだれかの目を通して見ているのだと感じたのです。はじめはただの夢だと思いました。しかし、日がたつにつれだんだんとその映像は鮮明になってきました。自分がおかしくなったのかとも思いましたが、余りにも視えるものに現実感があるので誰かが視ている風景を視ているのではないかと考えるようになったのです。」

シュロからは、確信とわずかな怯えを感じ取った。この現実を目の当たりにしながらも受け入れきれない感情があるのだということが伝わってくる。

「子を身ごもってからと云ったが……。ぶしつけだが、その子の父親は。」

大巫女の質問に、そう聞かれることを予想していたのか少し目を伏せるとシュロは云った。

「この子の父親は、旅のものでした。去年の秋祭りにやってきた旅の楽師です。私の村では毎年秋祭りに西方から楽師を招いて、宵の宴を開いていました。私は、もともと早くに身寄りを亡くし一人で村に暮らしていました。私の後ろ盾となってくれたのが村長だった叔父でした。私は叔父の家の手伝いなどをしながら、生活していました。秋祭りの時、招いた楽師のお世話を私がすることになりました。今年の楽師は5人の楽団でした。その中で横笛を吹いていたのが、この子の父親です。私たちは何故か大変惹かれあいました。彼がこのひとときで帰ってしまうことを私は分かっていました。もち

ろん、彼も。でも私たちは思いを止めることができませんでした。たった一晚の逢瀬でした。彼は秋祭りが終わると村を出発しました。それから三月、私は自分の体の中に命が芽生えていることに気付きました。この子がおなかにいると分かったとき、私は悩みました。叔父は可愛がつっていた姪が、旅の楽師にもてあそばれたと怒りをあらわにしました。私は彼の子を宿したことに後悔はありませんでした。でも、今までお世話になった叔父に迷惑をかけてしまうことはとてもつらい現実でした。」

シュロはうつすらと目に涙をたたえていた。それでも、言葉を止めずに語り続けた。

「その頃からです。私が不思議な夢を見始めたのは。叔父は私を氣遣い、子どもと一緒に娶ってくれる者を探し始めました。叔父の氣持をありがたいと思いつつも、私はまだ彼のことを忘れられずにいました。しかし、この成長は待ってくれません。少しずつ私のおなかも大きくなっていきました。この子がおなかの中で動いているのが分かるようになると、頭の中に声がするようになりました。」

シュロは少し目立ち始めてはいるがまだまだ小さな腹をいとおしげに撫でた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2402q/>

朱月の巫女

2011年4月4日18時49分発行